



ISBN4-573-14214-2

C3076 P10000E

9784573142145

定価 10,000円
(本体 9,709円)

1913076100002

婦人画報社



花ふたり旅

LOVERS' JOURNEY WITH FLOWERS

桑原専慶流家元 桑原仙溪 桑原素子

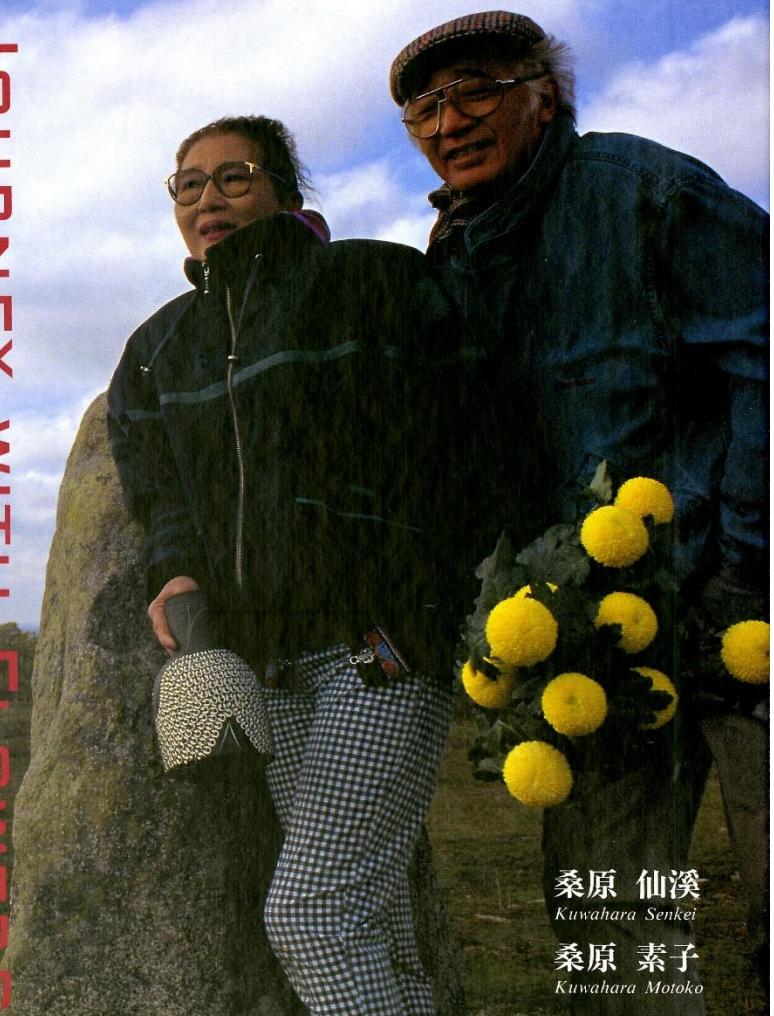
婦人画報社

花ふたり旅

LOVERS' JOURNEY WITH FLOWERS

桑原 仙溪
Kuwahara Senkei

桑原 素子
Kuwahara Motoko





LOVERS' JOURNEY WITH FLOWERS

花ふたり旅

IKEBANA by
Senkei Kuwahara &
Motoko Kuwahara

Photographs by
Mikio Matsuo

桑原
仙溪
素子

写真・松尾幹生

婦人画報社

Senkei

桑原專慶流十四世家元
桑原仙溪

花は、私達ふたり旅の道標である。振り返ってみると、今まで駆け抜けてきたような恍ただしい30年だった。

中年になってからいけばなを始めた私と、家元の跡継ぎとして、花と共に育ってきた素子との二人が、お互いに納得し合える旅路を見つけ出そうというのかなり難しいことである。だが“花”という美しい道標は、方向を見失いそうになったときには、はっきりと行先を示してくれたし、息をきらせながら走り抜けて行く私達に明るく微笑みかけてくれました。

花をいけることは私達の仕事ではあろうが、花そのものは私達の人生の指針だったのである。“花ふたり旅”は私達を30年間導いてくれた花の記憶を、1993年から1996年にかけての旅の形で表現してみようとした一冊である。

花の旅なら国内でもいいのかもしれないが、あまりにも便利になりすぎて、どこへ出掛けてもせいぜい一寸出張してきたという感じしかしない。花材も京都の店で買いつとえ、現地で少し買い足すくらいですむし、花器も持つて行ける。ところが日本を離れると、花材の調達、花器を買い揃え、予定しておいた撮影場所を再確認に出掛けるなど、何から何まで、一から始めなければならない。

目的地つくと、まず花材の調達から始める。私達はどこへ行っても花の卸売市場で買いつとえている。欧米の街の花屋は、自分の店で作ったフラワーデコレーションを売ることを主にしているようで、日本の花屋のように、いけばなの素材としての花を売っているのとは少し違う。露店の花屋もあるが品質はよくない。

着いて2~3日はそんなことで過ぎるが、ホテルの部屋は花と買い物集めてきた花器、工具類で一杯になる。そして撮影の前日には翌日いける花の下いけや色々な準備におそくまでかかってしまう。

撮影日には早朝大きい花包み、工具、花器、撮影機材をワゴン車に積み込んで出掛けるのだが、好きな道とはいうもののかなりの重労働である。この写真集の中には夜景もあるが、そんな日はホテルに帰りつくのが深夜になる。それから持てた花を整理し、まだ使っていない花も全部水切りして、新しい水につけて息を吹きかえらせてやらないではならないので、ベッドに入る時間は更におそくなる。

そんな旅を3週間ずつ4年間続けたのだが、私達の旅路はいつ果てるのかは知らない。

私は70歳、素子は65歳。二人揃つていままで丈夫でいられるかわからない。このふたり旅が終ったら又、次の旅程を立てよう。

あまり長丁場でなく……。

Flowers they're the signpost of our journey. When we look back, time has flown very quickly these past thirty years.

I started to learn Ikebana at middle age, while my wife Motoko grew up with flowers as the daughter of a Ikebana school master. (Ikebana : flower arrangement)

Due to our differences, it was not always easy for us to find points on which we readily agreed during our 'trip with flowers'. However, "the beauty of flowers" like a signpost led us where to go and what to do when we experienced problems. It gave us a gentle smile when we could not afford to think of others or our circumstances very much.

Arranging flowers is our vocation, but flowers themselves have been the guiding principle throughout our life.

This "LOVERS' JOURNEY WITH FLOWERS" tries to describe our memories with flowers and the spirit of flowers which have been leading us for thirty years. It introduces several journeys in Europe from 1993 to 1996 showing selected flower arrangement works.

Our work is suited to Japan, however, outside influences inspired us to work also in Europe. These days it is very convenient to do anything in Japan and that makes us feel like a break from it all. We can get most of the flowers at the shops in Kyoto and if we need something different, it's possible to find them on the spot. It's also easy to carry the vases and vessels anywhere. On the other hand, when abroad, we have to start from the beginning. For example, preparation of flowers, going out to confirm the expected shooting scene and the like.

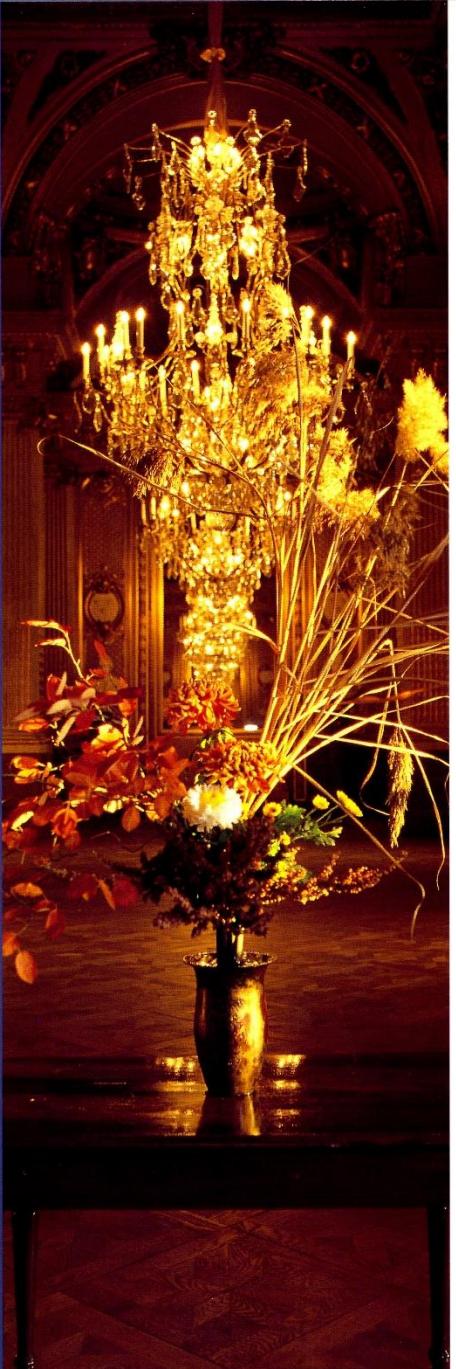
On arrival, we first start preparing flowers. Wherever we visit, we go and get flowers at the flower markets. Florists in Europe have a tendency to mainly sell flower decorations which are made at each shop. In that respect, they are different from the florists in Japan who sell flowers as materials for flower arrangement. There are also some stall flower shops, but the quality of these flowers are not really appropriate for our needs. Just finding the right materials takes several days after our arrival. The room of our hotel becomes full of flowers, vases and tools which we have collected. We're busy preparing until very late before the shooting day. We leave the hotel in the early morning with a big bundle of flowers, and shooting - related equipment, which are put into a car. There are some night views in this book and when shooting night scenes, we're invariably back to our hotel after midnight. Then we separate serviceable flowers from useless ones. We also cut the stems of the useful flowers to allow them to absorb moisture more readily.

Doing this and that our bed time gets even later. We enjoy our job but, surprisingly, it's actually quite physically and mentally demanding.

I'm seventy and Motoko is sixty five. We don't know for how long we can continue sharing our job in good health but, let's take it easy. We'll continue to travel in the future, as we have previously done, without too many expectations.



Kuwahara



スウェーデン

スモーランド地方 ————— 8~19
SMÅLAND
■エーフォス ■コスタ ■エланд島
ÅFORS KOSTA ÖLAND

ストックホルム ————— 20~29
STOCKHOLM
■ガムラスタン(古市街) ■サルホール(市場) ■スカンセン
GAMLA STAN SALUHALL SKANSEN
■レストラン ■教会 ■オペラ座
RESTAURANT KYRKA OPERAN

アメリカ

ニューヨーク ————— 30~45
NEW YORK
■マンハッタン ■ニュージャージー ■ブルックリン
MANHATTAN NEW JERSEY BROOKLYN

ワシントン ————— 46~51
WASHINGTON

ニューオーリンズ ————— 52~59
NEW ORLEANS

SWEDEN

トルコ

イスタンブール ————— 60~75
ISTANBUL

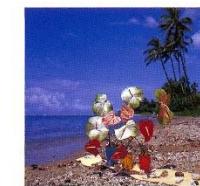
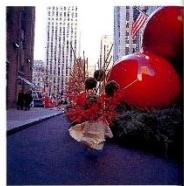
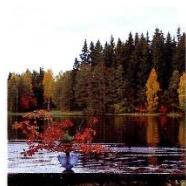
エジプト ————— 76~83
CAIRO/GIZA
ナイル川 ————— 84~85 88~89
NILE
ルクソール ————— 86~87
LUXOR

AMERICA

TURKEY



目次 contents



ヨーロッパ

オランダ・ドイツ・スイス ————— 90~93
THE NETHERLANDS/GERMANY/SWITZERLAND
デルフト(オランダ) ————— 90~93
DELFT

アムステルダム(オランダ) ————— 94~95
AMSTERDAM

ライデン(オランダ) ————— 96~97
LEIDEN

ケルン(ドイツ) ————— 98~107
KÖLN

ジュネーブ(スイス) ————— 108~121
GENÈVE

EUROPE

ハワイ

ホノルル ————— 122~127
HONOLULU

HAWAII



●素子 1993年9月29日 ヴァリーン邸アトリエ入口(スモーランド地方 エーフォス)
■花器／ガラス(ウルリカ・ヴァリーン作) 花材／ガーベラ、穂天下草、枯萎
『SMÅLAND, ÅFORS/MOTOKO, SEP. 29, 1993』

Åfors SWEDEN

下の娘が小さかった頃、よく読んでやったスウェーデンの絵本に、屋根の上が草茫茫の小人の家があった。そしてその上に大きなバッタがいて、その草を食べている。娘同様、私も「変な家だね」と、絵空事かと思っていたが、本当にそんな家があったのである。

ストックホルム郊外のスカンセンという、日本でいえば明治村のような公園に、移築された古い民家でそんなのがあった。ベンベン草といった貧乏くさいものではなく、屋根にしっかりと雑草が根づいて生い茂っている。そしてそこには孔雀が飼われていて、虫をつぶしていた。何のために屋根の上に草を茂らせているのか知らないが、今でも田舎に行くと少しほそんな家が残っているらしい。古い民家の多くは家の外側が赤茶色の紅殻塗りの板張りで、破風と窓枠が白で隠されている。

ヴァリーンの家もそんなスウェーデンのカントリースタイルの家だが、屋根に草は生えていない。少し異色なのは、扉や壁面のあちこちにウルリカの絵が描きつけられている点である。素子がガーベラをいけたのもそんな扉の前で、何かを考えていそうな赤い蛇が絵付けされたガラスの花瓶も彼女の作品である。

その日ウルリカは私達をもてなすために、羊の大きな腿をローストしていたが、何度も手をとめて、どんな風にいけ上がっていくのか見にきては、素子と何か話し合っていた。どうやらお互いに満足のいくで映えだったらしく、写真を撮り終えると仲良く台所へ行ってしまった。

ヴァリーンの家では、紅葉の立花、左貢のガーベラの投入、13頁の門柱、そして17頁の葛と棕櫚の実をいけた。

ヴァリーン夫婦の家や、そこから北北西へ車で15分くらい離れたオレフォスコスタボダ社の工場は、こんな所にガラス工場がと思うような豊かな自然環境の中に建っている。私は日本のガラス工場も知っているが、騒音の大きさと熱気、そこにトラック音まで加わるので、そのあたりに住めるものではない。ところがコ斯塔村では工場の通りをへだてた所に、歴代の社長が住んだ家がゲストハウスとして残され、工場のデザイナーや職人達の家が、周囲の林の中に点在している。かなりのガラス製品を生産しているのだが、工場を中心とした小さな村落といった感じである。

うらやましい生活環境だが、スウェーデンの国土の面積は日本の1.2倍で、人口は15分の1の800万人、人口密度は17分の1である。ということは現在の日本列島に700万人だとスウェーデンのような国になる訳である。日本の人口が700万人くらいだったのはいつのことだったのだろう。多分、弥生時代くらいまで遡りなければならないだろう。だが生活環境の良さを人口密度で割ってみてもはじまらない。日本も暮らすよう次第では、結構いい国なのである。なるほどパーティ



ルとウルリカはあの環境があつてこそ良い仕事をしているが、私達夫婦には淋しすぎて、住んで仕事をしていけるような風土ではなさそうである。

広い国土に少ない人口、スカンジナビア半島のスウェーデンの西隣のノルウェーや、ボスニア湾の対岸のフィンランドも人口密度は同様に低い。このあたりが完全にキリスト教化された歴史は、他のヨーロッパ諸国より何百年か遅く、10世紀頃からである。それまではヴァイキング独自の宗教で歴史が重ねられてきた。そのせいか、パーティルの作品にはキリスト教的なテーマがない。それは近代芸術一般の傾向だろうが、彼にそんな話をすると「俺はヴァイキングの子孫だからな」といっていた。

このあたりにもその時代の遺跡がちらばっているようで、キリスト教の教会の墓地にも、キリスト教化される以前の、ヴァイキング時代のルーネ文字を刻みつけた自然石の墓標がある。ルーネ文字でどんなことが書かれているのか私にはわからないが、十字架らしきものは全然彫り込まれていない。ヨーロッパの中部や南部ではあまり見かけない、二つの宗教の共存の姿なのかもしれない。

一度ヴァイキングの遺跡に行ってみたい、そしてそこに花をいけたいという思いで出掛けたのが、18頁のエランド島である。この島の南に古代ヴァイキングのお墓がある。島は南北150kmぐらいで鉛筆のように細長い。夏は海のリゾート地だが、秋から冬にかけてはバルチック海からの強風が吹き付ける日が多く、この日も風速30mはあったと素子は正在する。彼女も1作いけたのだが、花は吹き飛ばされてどこかへ行ってしまった。私はウルリカの重い花瓶にご覧のような花材をいけたので何とか写真になったのだが、墓石は海の男らしく船の形に並べられていた。

右頁の奇妙な小像はヴァーリーン家の門柱の上にせられている。ウルリカの作ったものだが、入ってくる人の品定めをしているような目つきである。そこに目が二ついたように見える切り株をそえてみた。宇宙人の顔みたいにも見える。

これでこの家にも悪い人は入ってこなくなるだろうが、少し気味が悪い。切り株の上にパーティルの花器をのせて、真弓と百合をそえてやると、二人の目つきはおだやかになつて訪問客をこわがらせなくなったようである。

使った真弓の実は日本の大正よりずっと色が鮮やかで冴えている。澄み渡った青空からの日光に充分照らされる暁と、夜のきつい冷え込みが、真弓の実をこんなに美しく色づけるのである。日本より秋が終わるのはずっと早い。この作品を撮ったのは9月29日だったが、少し曇っていたので気温は10°Cぐらいまで下がっていた。

この真と14頁の3作を飾ったのは、コスタボダのゲストハウスである。250年前にこの会社を創立した人の住宅だったそうだが、完全に手入れされた典型的なスウェーデン家屋である。この撮影までに4回泊めていただき、家族5人で来たこともあった。ここではこれが本当のスウェーデンの味、そんな家庭的で質の高い料理でもなされる。別にスウェーデン料理に詳しくはないのだが、確かにそうだと感じさせられる味わいである。食事を作ってくれているのは60歳ぐらいの女性だが、毎秋続けて4回もお世話になったので、すっかり顔なじみになった。この頃西洋料理をあまり好まなくなった素子も、ここ夕食は毎回心から楽しみにしている。

小品生花は工場の駐車場の横に生えていた西洋肝木で、ゲストハウスのダイニングルームの窓辺に飾った。西欧的な雰囲気の中でも、日本の小さな古典生花はしっかりと存在感をえているようである。下の投入の主材はストックホルムで買った電気スタンドの傘だが、北欧の人が好んで使う明るい色調で、素子には造花よりずっと魅力的だったらしい。はじめから自分のいけばなの部として買ったものである。



●素子 1993年9月30日 コスタボダのゲストハウス
(スモーランド地方 コスタ)
■花器／ガラス(グネル・サリーン作) 花材／西洋肝木
『SMÅLAND,KOSTA/MOTOKO/SEP.30,1993』

Afors Kosta SWEDEN



●仙溪 1993年9月30日 コスタボダのゲストハウス
(スモーランド地方 コスタ)
■花器／ガラス(パーティル・ヴァーリーン作) 花材／西洋肝木
『SMÅLAND,KOSTA/SENKEI/SEP.30,1993』

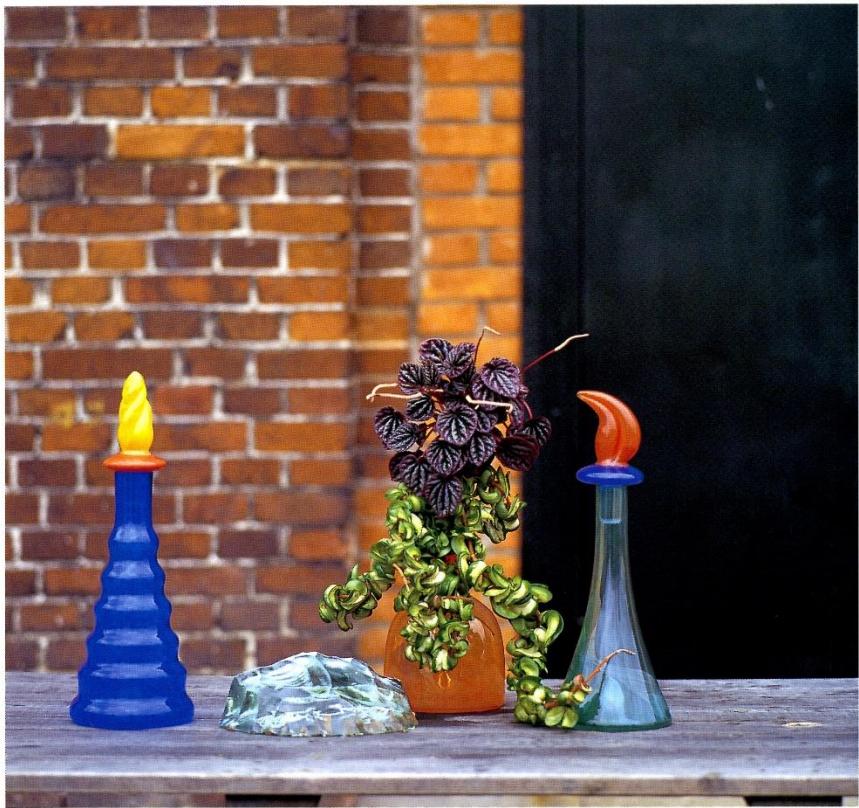
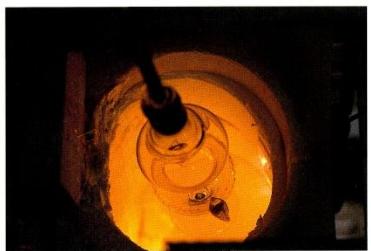
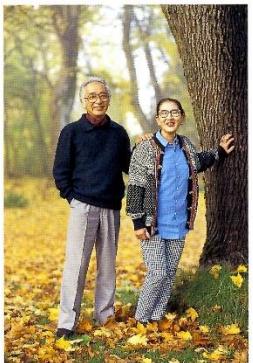


●仙溪 1993年9月29日 ヴァーリーン邸
(スモーランド地方 エーフォス)
■花器／ガラス(パーティル・ヴァーリーン作) 花材／真弓、ユリ
『SMÅLAND,AFORS/SENKEI/SEP.29,1993』

SWEDEN
Kosta



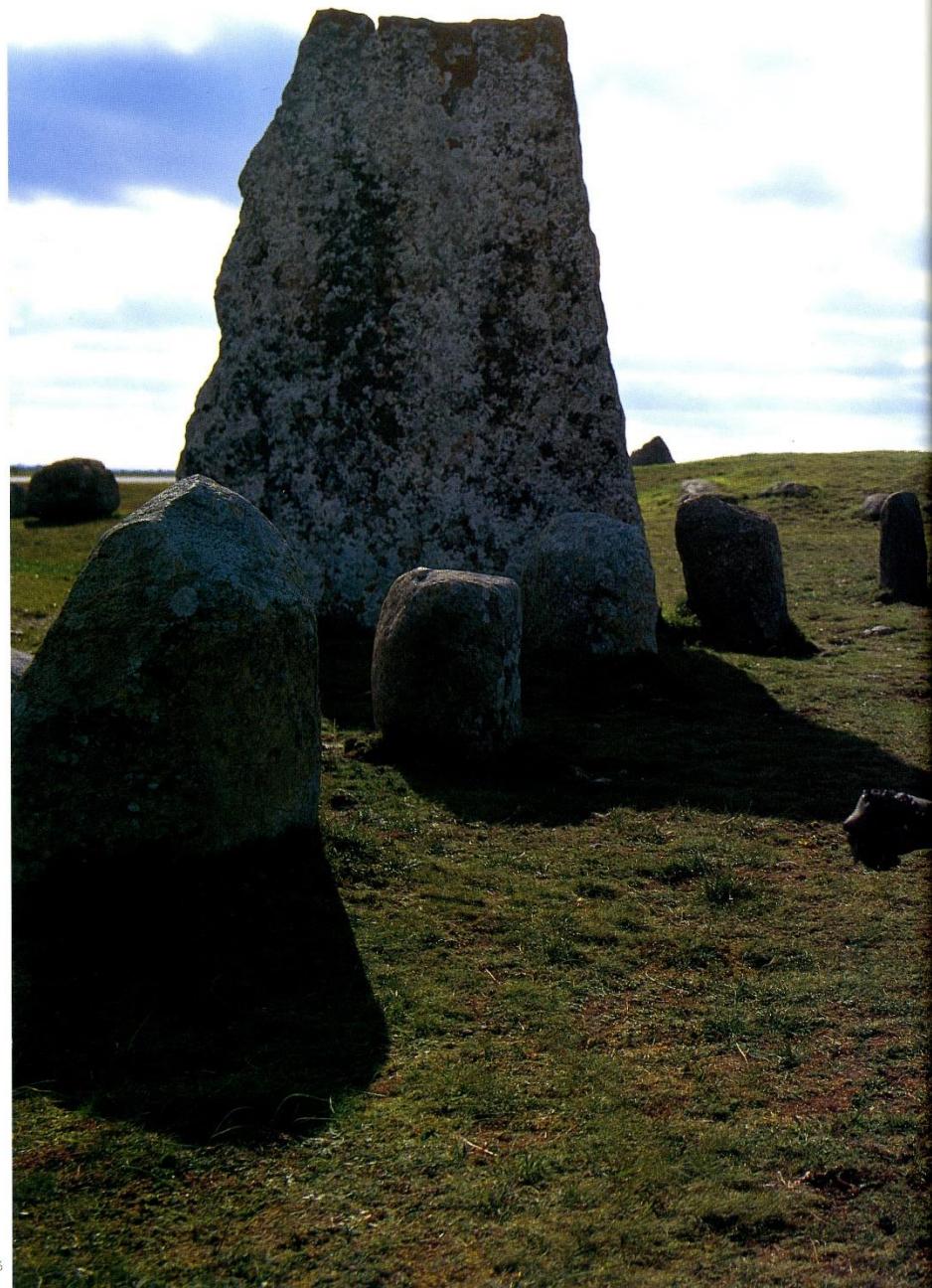
●季子 1993年9月30日 コスタボダのゲストハウス
(スモーランド地方 コスター)
■花器／ガラス(アン・ヴァルストロム作) 花材／ホオズキ
SMÅLAND,KOSTA/MOTOKO/SEP.30,1993



●素子 1993年9月30日 コスタボダの工場(スマーランド地方 コスタ) ■花器／ガラス(アン・ヴァルストロム作) 花材／ペベロニア2種
『SMÅLAND,KOSTA/MOTOKO/SEP.30,1993.』



●仙臺 1993年9月30日 ヴァーリン邸裏庭(スマーランド地方 エーフォス)
■花器／ガラス(ヨーラン・ヴォルフ作)
花材／蕉、棕櫚の実、苔
『SMÅLAND AFORS/SENKEI/SEP.30,1993.』



●仙溪 1993年10月1日 ヴァイキングの墓
(スモーランド地方 エラン島)
■花器／ガラス(ウルリカ・ヴァリーン作)
花材／マンザニータ、葡萄枯枝、榦、乾燥海藻
『SMALAND,ÖLAND/SENKEI/OCT.1,1993』



Stockholm SWEDEN

ストックホルムは700年ほど昔、8000余りの群島のうち、22の島でできた島の上で、徐々に発展してきた街だそうである。地図をひろげてみると、ストックホルム市の東部にはそれぐらいの島がありそうだし、湖も多くて海と入り組んでいるので、車で走っていても海中の島にいるのか、スカンジナビア半島の大陸部にいるのかさっぱりわからない。だが水の上に浮かぶ都市の中では、最も美しくて見飽きない景観をそなえた街だろう。

鞄のバッグにいれた花を置いたのはガムラスタンの石畳の上で、まだ人通りのない小雨ふる早朝である。

ここはストックホルムで最初に開けた地区、というより島で、発祥は13世紀だそうだ。往時の面影は薄れているのだろうが、古い町並みは何度歩いてもいいものである。

このガムラスタンのヴェステルロンゲガータン通りは、京都でいえば新京極のようなものなのだが、建物が古くてがちりしている。所々スウェーダー、手作りの軽い靴、民芸品の質の高いものを置いている店もあるが、大半はどこで作られたのかもわからないTシャツやプラスティックのお土産を置く店で、観光客でごったがえしている。

歩いていていいのはガムラスタンの裏通り、写真のような道筋である。所々他の通りに抜けられる京都のような路地があり、中にはその上にも家の建っている所があって、よく覚えておかないとなかなか目的の場所に行き着けない。

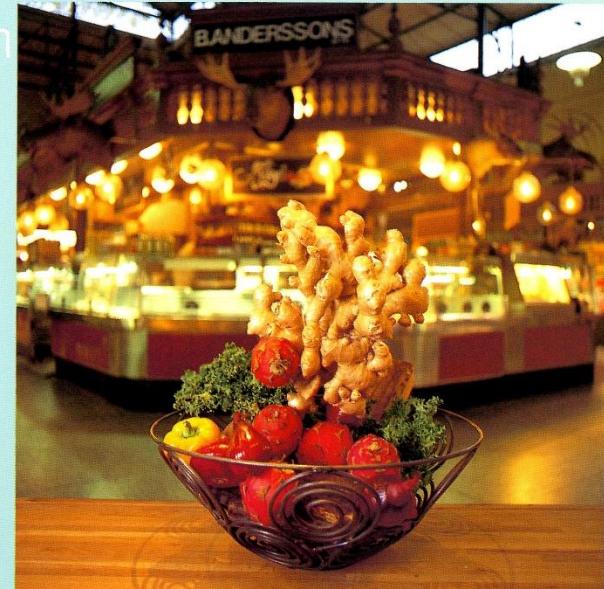
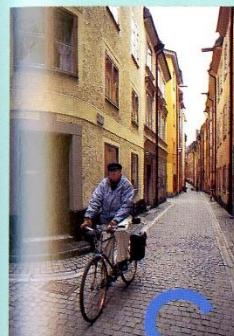
このガムラスタンにも、最近はスウェーデンのヤッピー達が住みはじめたそうだが、こういう古い街の古い建物の中を賃貸に改装して住みたいという気持ちは私にもよくわかる。この花の撮影の終わる頃、通りの先の黄色い壁の家から若い重役風のヤッピーが出てきたが、開けられた扉の奥に、大理石とステンレスを使ったいい内装が垣間見えた。古い建物をこわさずに美しく住み替えるということは、どの国の古い街にも必要な市民の心掛けなのだろうと思う。



● 撮影 1993年10月4日 旧市街地 ガムラスタン(ストックホルム)
■ 花器／民芸布バッグ 花材／ガーベラ、菊造花、萬葉
「STOCKHOLM,GAMLA STAN/MOTOKO/OCT.4,1993」



Stockholm



●季子 1993年10月4日 市場、サルホール(ストックホルム)
■花器／鉄籠 花材／生姜、圓扇サボテンの実、ピーマン、レッドオニオン、チコリ
「STOCKHOLM/SALUHALL/MOTOKO/OCT.4,1993」

SWEDEN

王立劇場の東側の坂を上ると、サルホールという市場がある。素子のいれた野菜類の中で、赤い果物はメキシコあたりから送ってきた団扇サボテンの実である。植物図鑑で見たことはあったが、こんな北の国でその実物をいけるとは思ってもいなかった。変なめぐり合わせである。

背景は肉屋だが、秋になると鼈鹿や驯鹿の他にも色々な野生動物の肉が店にならぶそうだ。写真にも写っているようにその頭が飾られている。肉といえば牛肉と豚肉しかなじみのない私には、野生動物の種類が多い国では肉類にも季節があるのでということに改めて気づかせられたのである。

この市場の中にも小さい花屋が1軒あったが、スウェーデンの花の旅で幸運だったのは、空港から市内のホテルまで乗ったタクシーの運転手君に出会ったことだった。

旅行の目的を話して、どこかいい花屋はないかと尋ねたところ、貴方達が考えているだけの花の種類と量が必要ならストックホルムの花市場へ連れて行ってあげよう、私はつい最

近まで花市場に勤めていたからと申し出てくれたのだ。そして花市場は明日は日曜で休みだが、下見しておいたらどうです。警備員にいて見られるようにしてあけるからとまでいたってくれたのである。おかげでスウェーデンでの花は充分集めることができた。名前は本名でラッキー君といったが、私達にとって本当にラッキーな出会いだった。

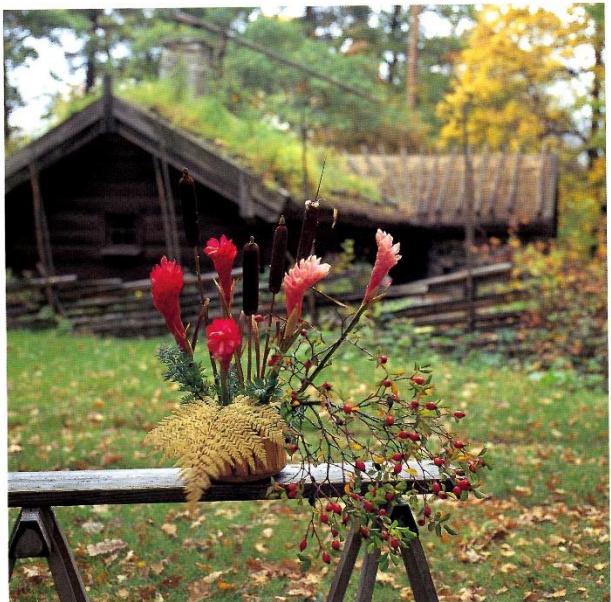
彼は仕事柄ストックホルムを隅々まで知っているので、予定していた撮影現場にも案内してくれたし、彼が東洋人の奥さんと結婚式を挙げた郊外の小さな古い教会でも、好きなように写真を撮らせてもらえるようにとり計らってくれた。26頁と27頁がその教会である。

ストックホルムで最後に撮った枯草の立花は、王立オペラ座の莊厳なメインロビーにいけた。こんな金色の部屋は日本では見られないが、思い切って同系色に近い、紅葉しかけた枯草を主材にいけてみた。

いい経験になった立花の一編である。



●栗子 1993年10月4日
野外博物館、スカンセン
(ストックホルム)
■花器／木製手付盆
花材／バラ、アンセミス、西洋ノコギリソウ
『STOCKHOLM,SKANSEN/MOTOKO/OCT,4,1993』

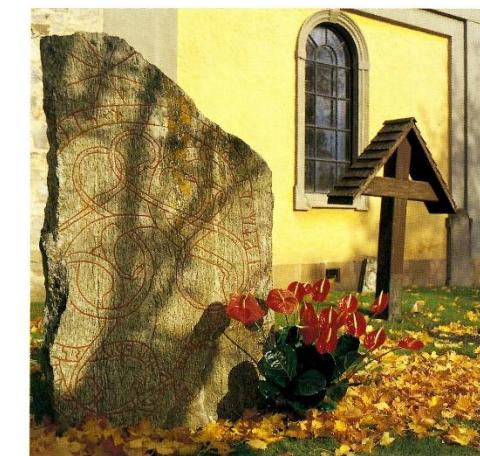
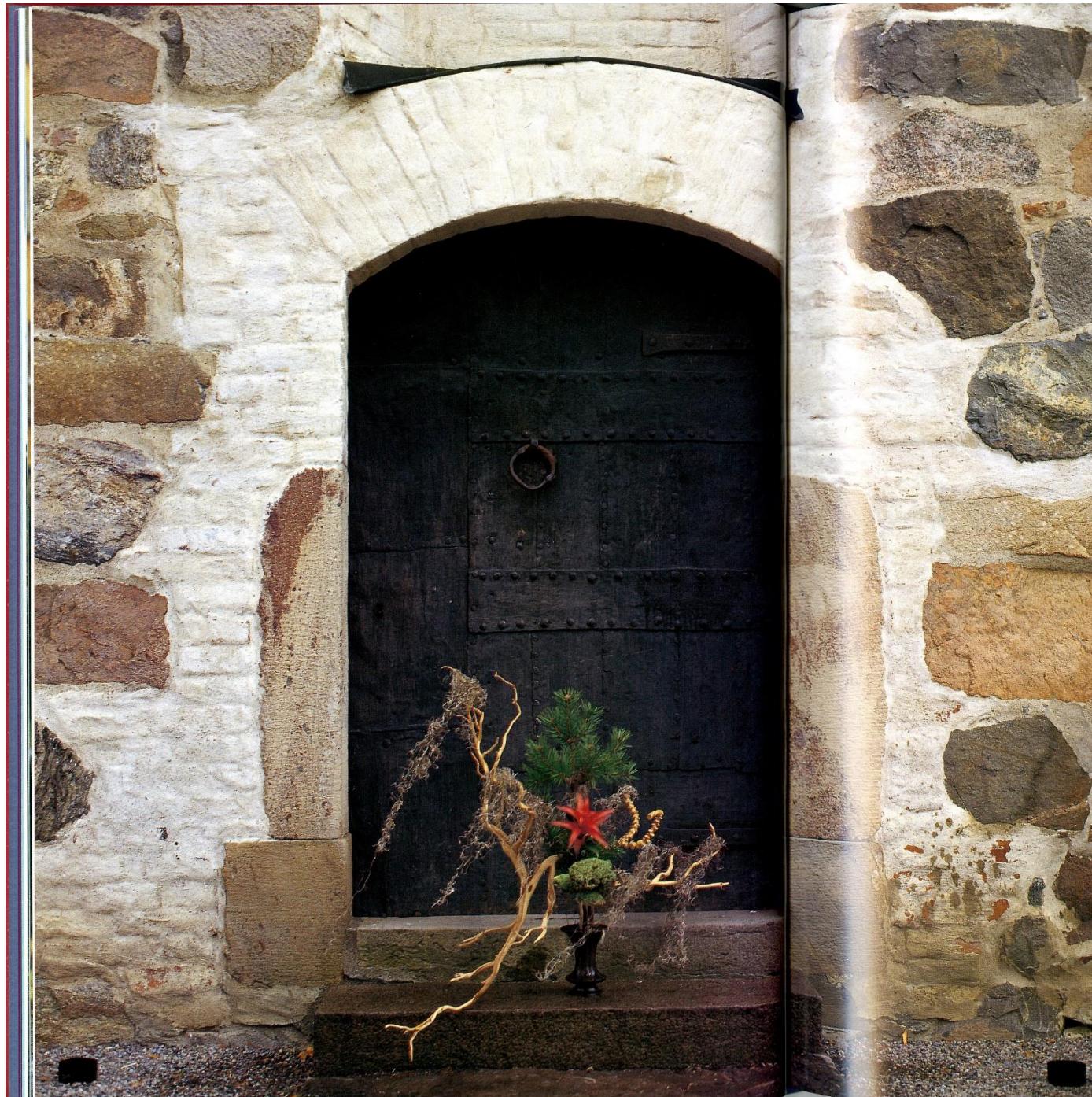


●仙鏡 1993年10月4日
野外博物館、スカンセン
(ストックホルム)
■花器／白樺ボウル
花材／レッドジンジャー、バラの実、シダ、葉
『STOCKHOLM,SKANSEN/SENKEI/OCT,4,1993』



●栗子 1993年10月5日 郊外のレストラン(ストックホルム)
■花器／金メッキボウル 花材／オニソガラム、エリカ、ゼラニュームの葉
『STOCKHOLM/MOTOKO/OCT,5,1993』

Stockholm
Skansen
SWEDEN



●素子 1993年10月5日 郊外の教会(ストックホルム)
■花器／木製ボウル 花材／アンスリューム、柏葉コムノキ
『STOCKHOLM/MOTOKO/OCT.5, 1993』

●仙溪 1993年10月5日 郊外の教会(ストックホルム)
■花器／立花瓶 花材／マンザニータ、ヨーロッパ赤松、狼おがせ、アナヌス、苔、枯葉
『STOCKHOLM/SENKEI/OCT.5, 1993』

SWEDEN

Stockholm



●仙溪 1993年10月5日
王立オペラ座(ストックホルム)
■花器／創立花瓶
花材／菊、枯草、小菊、ギシギシ、紅葉樹
『STOCKHOLM, OPERAN/SENKEI/OCT.5, 1993.』



クリスマスを間近に迎えた冬のアメリカ。

銀色の月と摩天楼、そして華麗なイルミネーションに彩られたクリスマスツリー。

人種の併存であるアメリカに混在する古き良き時代と最先端の現在。

ニューヨークからニューオーリンズへの旅は、時代が道連れだった。



12月5日、ニューヨークに着いた朝、小雨が降っているのに妙に暖かい。

京都のほうが寒かったかな、と話しながら大きな荷物を迎える車に運んでいると汗ばんでくるほどで、この2、3日は異常気温なのだと感じる。

ニューヨークの冬の寒さと、夏の暑さの耐えがたいことは有名である。映画では気温まで表現しにくいようだが、街の生活が克明に描かれている刑事物の推理小説にはよくその寒さ暑さがユーモラスに表現されていて、なるほどそんな土地柄かということがよくわかる。

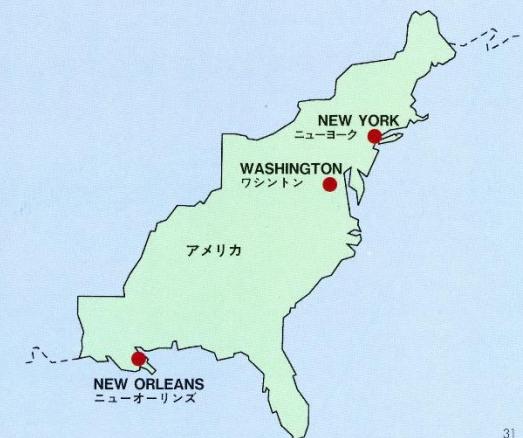
だが私達の住んでいる京都も冬の底冷えと、夏の蒸し暑さの評判は悪い。それでも京都のほうがまだいい。ニューヨークはハドソン川とイーストリヴァーにはさまれているので湿度が高い上に風が強いので、厚手のオーバーコートを着ていても体温を奪われて震えがとまらない日が多い。

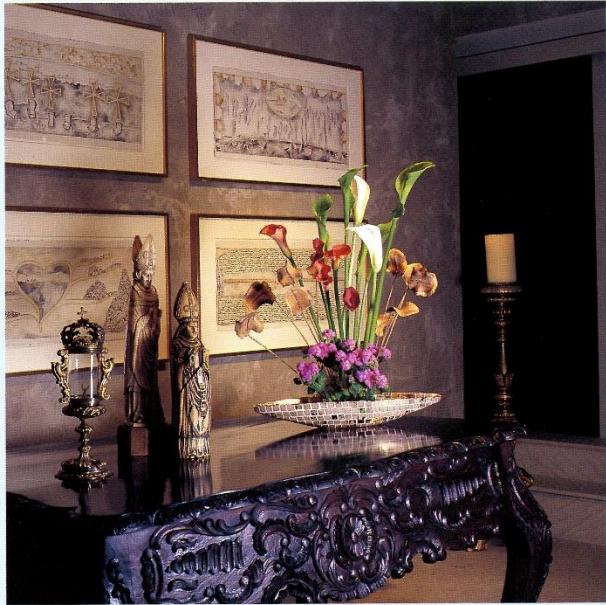
そんな寒さの街では、待降節の第2日曜日も過ぎたので、クリスマスの飾りつけが大分進んでいる。その中心はロックフェラー・センターということになっていて、RCAビルの前の背の高いクリスマスツリー、その80mほど西のラジオ・シティ・ミュージックホールの前に、どんな発想で作られたのか、直径2mほどの5個の真っ赤な球体のクリスマス飾りが道の真ん中にどんと置かれていた。

この投入は、前の晩からセント・パトリック寺院を背景にするつもりで下ごしらえして、予定通りの写真はとったのだが、すぐ近くに面白いものがあったぞ! ということになって少し西に場所を移し替えてみたのである。

赤い球体が、いけばなとして使った梅瓶の赤い小さな実を無限大に拡大したように見える。

ニューヨークで梅瓶が買えるとは思っていなかったが、レストランやブティックのショーウィンドウに、ときたま飾られているのを見た。とり合わせた苔の玉は日本の百貨店のニューヨーク支店で10個買ったのだが、腹の立つほど高価だった。朝7時過ぎ、そろそろ出勤する人々で混雑しへじめる直前のロックフェラー・センターの周辺である。





●素子 1994年12月7日 フェネロッサ邸(ニューヨーク マンハッタン)
■花器／舟形鉢器 花材／カラー、桜草、枯物（ペア・ピット）
『NEW YORK, MANHATTAN/MOTOKO/DEC.7,1994』

近くにニューヨークで最も美しいクリスラー・ビルや、あのエンパイア・ステート・ビルの夜景の見渡せるこの部屋には、メキシコ貴族のフェネロッサ氏が住んでいる。メキシコの貴族というのは、中南米を支配していたスペイン人の末裔なのだろう。彼はニューヨーク在住の私達の門下生の懇意さんの親友でまだ若い。

部屋は65階にあるが、細長いビルなので、それぐらいの高さになると風の強い日は確かに揺れるらしい。広いヴェランダに出ると星空が下界より美しいように見える。

随分前のことになるが、初めてニューヨークに着いた夜が満月だった。月のことをシルヴァー・ドラーとアメリカ人はいっているが、たしかにアメリカの月は銀色に輝いている。空を汚す排ガスの総量は日本よりもはるかに多いのだろうが、国土が広いので薄められるせいか、日本の月は金色ではなく銀色だったのに感動したことがあった。

フェネロッサ氏はいろんな美術品を持っていて、花と一緒に使えそうなものを何かと持ってきてくれる。横に飾った聖職者の古い小像も先祖がスペインから持ってきたものかもしれない。こんな飾り方をしてみると、何なく日本の仏前の供花のような感じになってくる。だがここはマンハッタンの高層ビルの一室である。

窓からの夜景をいれて撮った私の盛花の主材には、鳥の骨

Manhattan AMERICA

みたいな枯花材を使った。買った店ではサボテンの枯れたものだとしかわからなかったが、フェネロッサ氏が「これはメキシコにも多いガラ・デ・レオン。ライオンの爪と呼んでいるサボテンだ」と故郷の風土の話をしてくれた。

小さく写っている夜景の中で、鳥の尻尾の左下にあるのはクリスラー・ビル。枯れたジンジャーの右にぼんやり浮かんでいるのがエンパイア・ステート・ビルである。

鳥の大きな嘴の右のガラス窓に映っている提灯のような形のものは、窓の反対側にかかっている現代絵画で、来週からパリのポンピドー・センターに貸し出すのだそうである。

ニューヨークは人種の増加、そして時代性も混在して成り立っているように思える。フェネロッサ氏の部屋にも現代と古典がいりまじっているが、あっさりとした飾りつけなのでわかりやすい。アメリカで権威のあるらしい、インテリアデザインの雑誌によくそんな例が掲載されているが、時代物のヨーロッパ製家具で構成された部屋に、中国の螺鈿をちりばめた黒檀の衝立、その横に日本の掛軸に東南アジアの仏像など、諸国古物が装飾として飾られている。正に異文化の増加である。相当な金額を部屋につぎ込んでいるらしいのだが、その教養がある人は何を求めてるのだろう。キーンさんの家のように、飾られているものが私にもわかるように系統づけられていれば、花をいける余地もあるのだが。



●仙溪 1994年12月7日 フェネロッサ邸(ニューヨーク マンハッタン)
■花器／巻貝形大理石 花材／鉛張、ガラ・デ・レオン、枯ジンジャー、猿おがせ
『NEW YORK, MANHATTAN/SENKEI/DEC.7,1994』

戦後、日本の経済も上向きになって、外国への観光旅行にも出掛けられるようになった頃、大多数の人たちは第一番に行きたがったのはヨーロッパ、そしてパリとローマが目玉だった。その頃まではアメリカも経済的には他の追随を許さないほど強く、世界の富はニューヨークに集まっていたのがわかった。そんな都市へは世界中の面白いものが、良いものも悪いものも引き寄せられてくる筈である。

遊びに行くなら何故ニューヨークに行かないのかと思っていたが、10年ぐらいためから旅行社もヨーロッパ旅行を売り尽くしたせいか、アメリカの東海岸を盛んに売り出したはじめた。しかし、ニューヨークは危険な街だから帶の中は行動に充分気をつけてと、どんな旅行案内にも注意書きがついている。たしかに危なっかしい大都会ではある。

この街の人々は、自分の求めるものに向かって、ひたむきに生きている。その度合いが世界中で最も強いのが、このマンハッタンという市の中心なのだろう。ここに何万人がひしめき合っているのか知らない。それだけの人々の利害の衝突や、貧富のせめぎ合い、善意と悪意の交錯、おさまりきれない人種間の軋轢がひきおこす震動が地底まで届いて、その反響が地上の人々の心の振幅を更にひろげ、競争心を煽っているのではないかという感じがする。

遊びていれば眼度のない面白さ、一体良い街なのか悪い街なのか悩みようのないマンハッタンでも、早朝7時頃、出勤者が早足で会社に向かう姿を見て気持ちのいいものである。今日一日分の希望を背負っているような足どりである。

私達が五番街の中心地になっているセント・パトリック大聖堂の前で花をいけ、写真を撮っていても、見向ける人が立ち止まる人はいない。女性はスニーカーを履いて横断歩道を急いで渡る。脇には会社で履きかえるハイヒールを抱えている。男性はコーヒーとデニッシュを入れた袋を抱えている人が多い。会社へ着いてからの朝食らしい、中にはかなり身なりのいい中年の男性もいるが、会社でそんなものを食べなければならぬようなら、あまり偉い人ではないのだろう。この日は朝5時に頼んでおいたルームサービスで朝食をすませてカーライルホテルを出たが、出るときが大変だった。前夜遅くまでかかって作り上げた梅擬と苔玉の骨組み、そして夜に予定しているブルックリン橋での盛花までの5作分を車に積み込まなければならなかったのである。

写真には持て出た花材のごく一部しか使っていないが、いけはじめてから何が必要になるかわからないので、6番街のフラー・ディストリクトで5日と6日に買い集めて、スイートルーム一杯に広がっていた花の殆どを持って出なければならなかった。

カーライルホテルは、ニューヨークでは超高級ホテルの一つだが、私達のように仕事着で大きな花包みを扱いて朝早く出掛け、夜おそくヨレヨレになって帰ってくるような客は泊まっていないようである。

ニューヨークで花を買い集めたのは、6番街の26丁目から28丁目にかけて集中している花の卸問屋街で、フラー・ディストリクトと呼ばれている。ここで世界一需要の多いニューヨークの花のすべてがまかなわれている。

それぞれ専門の分野があって、薔薇を主にしている店とか中には枝物を揃えている店もあって、ここで梅擬や木瓜を仕入れた。乾燥花材を専門に扱っている店でエホロッサ氏の部屋で使ったガラ・デ・レオンを買った。私が使ったものより大きいのが沢山あって、日本で見たことのない花材なので店の人に日本に送りたいのだがと頼んだが、ワシントン条約で輸出は禁止されているので残念ですと丁寧に説明してくれた。丁度クリスマスシーズンなので高さ2~3mの樅の木が空き地に沢山立てられていたが、ニューヨークの郊外の道路脇に、この季節をあてこんだ樅の露店商も出るそうである。アメリカでクリスマスの花にされているボインセチアは本場だけのことはあって、色も豊富で高さ2mぐらいのものまで沢山並んでいる。切り花も店によって質はまちまちだが、良い店には見事な花が揃っているので、こんな所でまとめて買いたいとして、好きな所を選んで花をいけるのは実に楽しいものである。

朝のうちにセント・パトリック大聖堂と、ラジオ・シティ・ミュージックホール。昼頃からニュージャージーでハドソン川の強い川風に吹かれながら見渡したマンハッタンのスカイライン。夕方からとっぷり暮れるまでねばねばたブルックリン橋の下から見つめ、イーストリバー越しのマンハッタンの夜景。どちらが美なのか知らないが、遠くから眺めているだけでも興味のつきない大都市である。

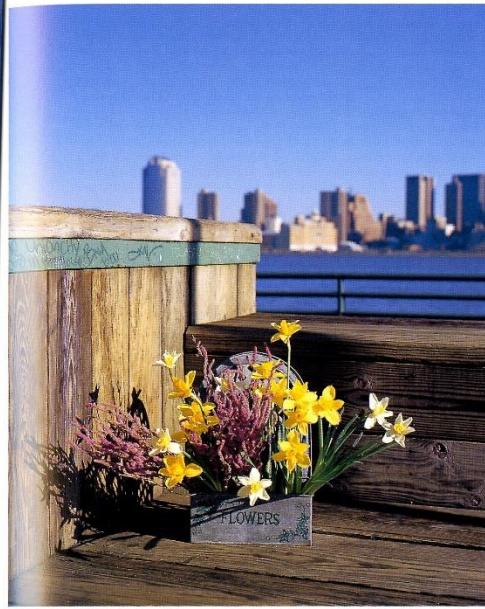
AMERICA Manhattan



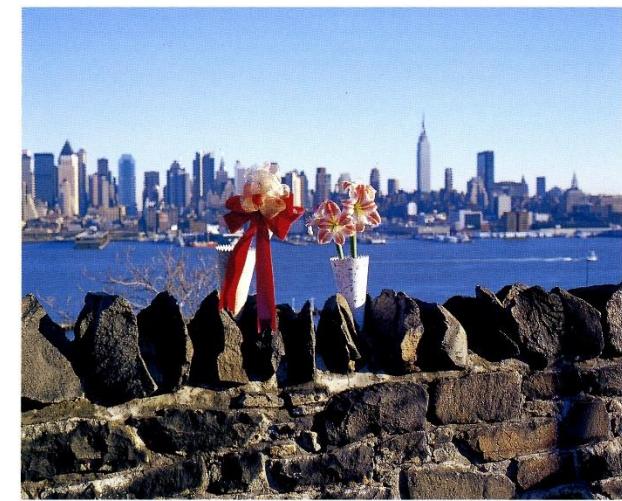
●素子 1994年12月8日
セント・パトリック寺院前(ニューヨーク マンハッタン)
花器、足付ガラス器 花材/苔玉、梅擬、竹、厚手滌紙
NEW YORK, MANHATTAN/MOTOKO/DEC.8,1994



●素子 1994年12月8日
マンハッタンを望むハドソン川のボードウォーク
(ニュージャージー)
花器／白樺、藁の舟 花材／ラッパ水仙2種、鶴頭
『NEW JERSEY/MOTOKO/DEC.8,1994』



●仙溪 1994年12月8日 ハドソン川のボードウォーク(ニュージャージー)
花器／郵便受け 花材／ラッパ水仙2種、鶴頭
『NEW JERSEY/SENKEI/DEC.8,1994』



●素子 1994年12月8日 ハドソン川を前に(ニュージャージー)
花器／紙 花材／アマリリス、リボン
『NEW JERSEY/MOTOKO/DEC.8,1994』



●仙臺 1994年12月8日 ブルックリン橋下(ブルックリン)
■花器／鳥形コンポート 花材／バラ、椰子の実
「BROOKLYN/SENKEI/DEC.8,1994」

ブルックリン橋は小説や映画の中で、何かを象徴するような場面によく使われている。同じニューヨークといってもマンハッタンとブルックリンは暮らす人々の生活や気風がかなり異なった二つの地域だからなのだろう。西側のニュージャージーからハドソン川をへだてたマンハッタンの遠景と、それより川幅のせまいイーストリヴァーごしに東側のブルックリンから見たのとでは、横顔がずいぶん違って見える。

目的のブルックリン橋の橋の下についたのは、まだ明るい内だったが、花をいいている間に空の色が刻々と変わってゆく。画面の左側の建物がマンハッタンの南端で、そこからは広い水面になっている。遠くに自由の女神像が見え、その上の夕焼け空が、建ち並んだビルの窓の明かりを取り囲んで片時も目をはなせないほどのスペクタクルである。水面にも空の色とビルの光る箱のような影が映る。

華やかでカラフルで輝いている。そんなマンハッタンを眺めていると、そこにこそ私の求めている楽しみが両手をひろげて待ち受けているに違いないという気分になってくる。こんなところにいけたいのはやはり薔薇である。それも艶脂色の花がいい。小粒の赤い実のついた椰子の実をそえていけ上げる。もしこの薔薇がレディーなら、向こう岸のマンハッタンで遊んでいらっしゃいと、花器にした金色の鳥を船にしてイーストリヴァーに送り出してやりたいところである。

この日も夜になると気温が下がってきた。写真を撮りつづけている松尾さんの指が凍えてシャッターがきれないというような何時間かだった。

ニューヨークでの取材を助けてくださった木野さんは、体は細いのに元気な女性である。買つけた大きな花包みを抱えてハイヒール履きですすいと通り抜け、キンさんのお宅へ連れて行ってくださった。ユダヤ系の大金持ちなのだそうである。その紹介してくれたデザイナーの八尾さんの計らいで、国連本部の中で撮ったのが次頁の立花である。

ニューヨークで最後にいけたのが、44~45頁の花である。場所はセントラルパークの東入口にある、タバーン・オン・ザ・グリーンというレストランのイルミネーション前。立木に沢山の電球を飾りつけたものは別に珍しくないが、これはど大がかりなのは他になさそうである。クリスマスも間近なこの時季にボインセチアはうつづけの花材で、ブルーもまじったこの光の装飾の前に置かれたピンクの花材は、夜の闇から浮えた色に浮かび上がった。

A
MERICA
Brooklyn



●仙溪 1994年12月9日 固連本部ビル(ニューヨーク マンハッタン)
■花器／立花板 花材／桜、赤芽柳、水仙、木瓜、黄楊、梅擬、小菊、枯木、ガラ・デ・レオン
『NEW YORK, MANHATTAN/SENKEI/DEC.9,1994』



Manhattan
AMERICA



●素子 1994年12月9日 キーン邸(ニューヨーク マンハッタン)
■花器／金コンポート 花材／カーネーション、アカシア
『NEW YORK, MANHATTAN/MOTOKO/DEC.9,1994』



●仙溪 1994年12月9日 キーン邸(ニューヨーク マンハッタン) ■花器／銀器 花材／水仙
「NEW YORK, MANHATTAN/SENKEI/DEC.9,1994」





●素子 1994年12月9日
セントラルパーク(ニューヨーク マンハッタン)
花器/足付ガラス器 花材/梅臘、ボインセチア、紙
『NEW YORK, MANHATTAN/MOTOKO/DEC.9,1994』

AMERICA

Washington

ワシントンに来ると、いつも「こんなに素晴らしい環境を作って、そこを政治の場としたのはどんな国民なのだろう」と思う。日本なら土地を購入するだけで、一年分の国家予算がとんでもない広大な緑の芝生の中に、ホワイトハウス、国會議事堂、国会図書館、植物園に、1週間かけてもまわりきれないほどの美術館や博物館、その上リンカーンやジェファーソンなどの偉大な大統領の記念建造物。現在ここでどんな政治が行われていようと、この政治環境を出現させたのはアメリカ国民の本来持っている善意であり、ここでは必ず正義が実現されるという期待の象徴なのではないだろうか。

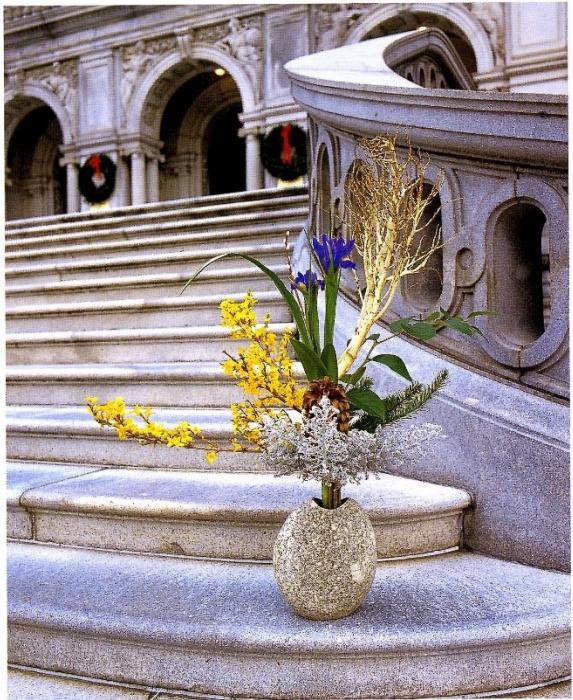
政治家や役人は事あるごとに正義が行われることを強調し、人々の善意を感じていると口にする。そして大多数の人々がそれを肯定している。これほどに正義を望み、善意を感じる国では悪党が生計を立てても大変だろう。悪党は悪党で自分なりの根拠と信念を持って大悪事にいそむことになる。それがあのすさまじいギヤング映画であり、ハードボイルドの推理小説なのだろう。

素子の花を飾ったのは、ホワイトハウスの前のクリスマスツリーである。前日ヒラリー夫人と令嬢によって点灯され、周囲に全米各州の小さいツリーが並べられている。大統領夫人のクリスマスツリーなら、もっと大きいかと思ってはいたが、文句なしに美しくてアメリカらしい華やかさである。

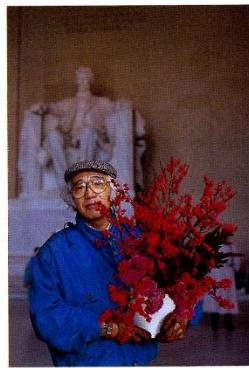


●素子 1994年12月11日 ホワイトハウス前(ワシントン)
■花器／創作陶器 花材／鶴頭、桂シーグレープ、百合
『WASHINGTON/MOTOKO/DEC.11,1994』





●仙溪 1994年12月11日 国会図書館前(ワシントン) ■花器／花崗岩丸彫花瓶
花材／桜子の花梗、アイリス、赤芽柳、レモンリーフ、連翹、枯ジンジャー、白蓮、槿
『WASHINGTON/SENKEI/DEC.11,1994』

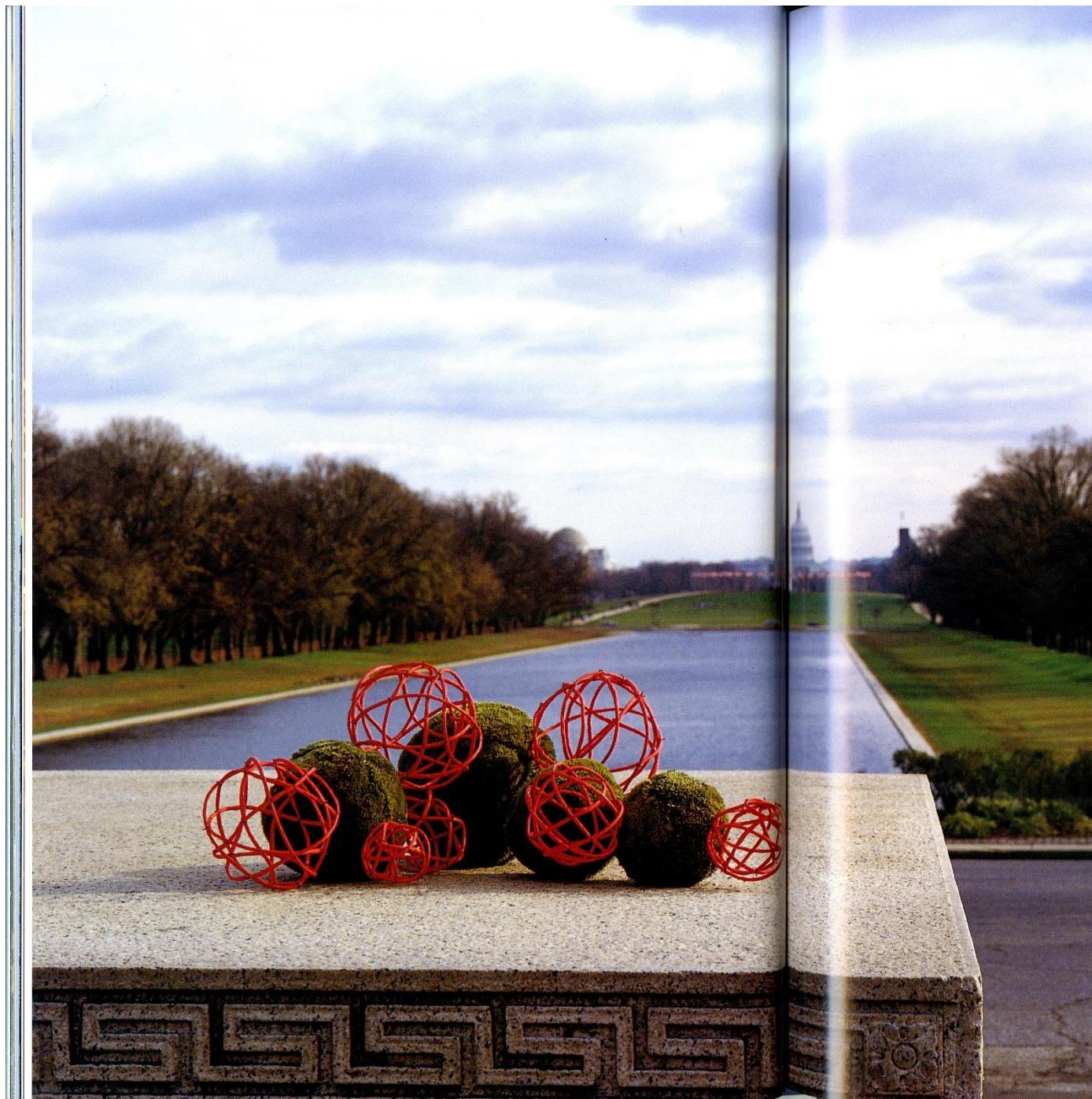


48



●仙溪 1994年12月11日 リンカーンメモリアル(ワシントン)
■花器／アイスペール 花材／梅臘、躑躅
『WASHINGTON/SENKEI/DEC.11,1994』

49



●素子 1994年12月11日 リンカーンメモリアル(ワシントン)
■花材／苔玉、絲紐の玉
『WASHINGTON/MOTOKO/DEC.11,1994』



●素子 1994年12月13日 セントルイス通り(ニューオーリンズ)
■花器／麦わらのトレイ 花材／椰子の実、胡蝶蘭、カラジュウム、マーリトン、ブードゥーのマスク
『NEW ORLEANS/MOTOKO/DEC.13,1994』

“ノーリングへようこそ”。飛行機が着陸するときスチュワーデスがそういった。ほー、土地の人はニューオーリンズのことをこう訛るのかなと思わせられたが、これはニューオーリンズへ着いたことを印象づけるための演出らしい。

土地の人はやっぱりニューオーリンズといっている。もしもニューアーカンズと発音する人に出会ったら、それは旧家の上流階級ということだそうである。

アメリカの都市はそれぞれ独自の表情を持っているにしても、そこには何か共通したアメリカしさを感じさせるものがある。ところが、このルイジアナ最大の都市ニューオーリンズだけは何かどこかがずれているようである。もともとフランス領で、フランス人が住んでいたからだといわれているが、フランスにもこんな感じの街があるのだろうか。

乏しい知識でそんなことを詮索していてもはじまらない。素子がニューオーリンズのイメージとして思い描いていた街の佇まいの一つが、このセントルイス通りの古い木造家屋だった。古びた堅木のドアは何度もベンキが塗り重ねられ、このドアを出入りした家の主が何十人も替わってきたことを感じさせる。2軒向こうの家には赤い賃貸札がついている。私達が借りても住んで暮らしていくことがわかっていても、ガイドに家賃を聞いてみたくなるような街である。

AMERICA

New Orleans





その中庭には、植えっぱなしで手入れされたこともないようなバナナの木が茂っている。壁もはがれかけている。だがこの家は『ニューオーリンズ・優雅と頽廃』という本に取り上げられていて、1825年にビーター・W・パトウという人が建てたものだと歴史がはっきりしている。

様式は典型的なクレオール・スタイル(ニューオーリンズに移民したフランス人の作った様式)でフレンチ・クオーターのロイヤル・ストリートに建っている。

今は画廊になっていて、フランス系アメリカ人らしい女性が経営している。ここで花をいけて写真を撮らせてほしいと頼んでみると、意味はよくわからないがお客様の邪魔にならないようにして短時間ならいいと、中庭を開放してくれた。

準備をしている間は、画廊の中から変な人達だなという顔つきで見ていたが、花をいければじめると興味をそそられたのか横に立って見物している。暫くすると店に客が入ってこないうように戸を開めて、すぐ近くのロイヤル・カフェの前で花をいれている素子の所へ行ったり、私の所へ戻ったりで、3時間以上店を休んでしまった。南部の人らしいのんびりさのかもしれない。

素子はこの街独特の雰囲気を作っているバルコニーのアイアン・レース・グリーリングを取り入れた花をいけてと予定していた。亜熱帯のニューオーリンズでは、夏の暑さをしのぐためにバルコニーを作り、その上に深い軒を張り出させて陽射しをさえぎっている。そのバルコニーの周囲を飾っているのが、アイアン・レース・グリーリングと呼ばれている美しい模様の鉄格子である。

バルコニーは歩道の上まで張り出しているので、いい日陰を作っているし、雨の日は路上ミュージシャンのいい稼ぎ場所にもなっている。ニューオーリンズに来れば、本家本元のディキシーランドジャズが聴けるということと、訪れる観光客も多い。そしてどのレストランやバーでも小編成のバンドが演奏している。そこに雇ってもらえない連中は、路上演奏で生計を立てているのである。そんな一席なので、どこで花をいけていてもトランペットやクラリネットの音が聞こえてくる。花を一心にいけていると、聞こえていないようでも意識下で心に響いているらしい。素子がロイヤル・カフェの前でいれた花には、どこなくディキシー調が感じられる。私が画廊の中庭でいれた花は、ニューオーリンズの優雅と頽廃といった感じなのだろうか。

フレンチ・クオーターは西がカナル・ストリートで区切られているが、ここからは1835年にできた、世界最古の路面電車が走っている。今ではセント・チャールズ線だけしか残っていないが、昔は何本も路線があった。ニューオーリンズには変な名前の通りがあって、デザイア(欲望)通りの路線はデザイア線と呼ばれ、電車の前面にはデザイアと表示されていた。これがテネシー・ウイリアムズの原作で、映画や演劇で世界的に有名な『欲望という名の電車』の題名の元になっている。素子はこの映画をよく覚えていて、昔と同じ電車が走っているチャールズ通りで花をいけて。花は勿論南部を代表するマグノリア(泰山水木)でそえたのは砂糖黍の茎。15分おきに通る電車を向台もやり過ごして撮った苦労の一作である。

AMERICA New Orleans

●美子 1994年12月13日 ロイヤル通り(ニューオーリンズ)
■花器/ザリガニ文様のボウル
花材/レッドジンジャー、パンパスクラス、唐辛子 卓/電線リール
『NEW ORLEANS/MOTOKO/DEC,13,1994』



56



●仙溪 1994年12月13日
墓地、オールドセメタリー(ニューオーリンズ)
■花器/鉄のキャンドルスタンド
花材/棕櫚の実、アイリス、百合
『NEW ORLEANS/SENKEI/DEC,13,1994』

ニューオーリンズはミシシッピ川の河口の低湿地なので、地面を少し掘ただけで水が湧き出てくるそうである。だから柩は地上に横たえられ、その周囲は大理石やセメントで覆われている。他のキリスト教国のように地面に十字架や墓石は立っていない。街で一番古いのがこのオールドセメタリーで、1700年代の終わり頃にできた。“花ふたり旅”には墓地でいけた花が8作あるが、お墓は葬られた人の生前の生き方に対する残された者の評価なのかもしれない。

このセメタリーにも様々な評価が文字通り3層にも5層にも積み重ねられている。

柩は次々と重ねられ覆っていくのである。中には外壁がはがれて内側の煉瓦が剥き出しになって、その層を数えられる墓もある。

古いニューオーリンズの優雅で頽廃的な生活の一部がまだ昇天しきらず、その辺に漂っているような感じを受ける墓地である。

New Orleans
AMERICA

57

●素子 1994年12月13日 チャールズ通り(ニューオーリンズ)
■花器／雄賀入れ 花材／砂糖黍、マグノリア、レモンリーフ
「NEW ORLEANS/MOTOKO/DEC.13,1994」



美しく装飾されたイスラム寺院が建ち並ぶトルコ随一の大都市、イスタンブル。
同じモンゴロイドでありながら、時の流れはアジアの西端と東端の
二つの国を、宗教も文化も遠い存在にしてしまったが、
チャイを飲みながらの花材調達はそれを忘れさせるひとときであった。



●素子 1995年5月22日 アヤソフィアを望む市内のホテル(イスタンブル) 花器／素焼耳付壺 花材／バラ3種
ISTANBUL/MOTOKO/MAY.22,1995

TURKEY Istanbul



ボスポラス海峡の東岸、アジア側の丘に陽が昇ると、西岸のイスタンブルは途端に活気づきはじめる。物売りの呼び声が響き、古いアメリカ製の乗合タクシーやヨーロッパ製の小型自動車は我先にと走りまわり、まるで迷路を走る実験動物の群れのようである。

7時からの朝食を終えて街に出ると、もうすでに数えきれないほどの人々が賑やかに商売をはじめている。私達も今日の花を買い入れ、花器を探す時間である。

新市街中心のタクシム広場に露店の花屋が出ているので、そこから廻ることにしたが、他都市の例にもれず、あまり良い花は見当たらない。だが売られている花は近郊の農家の庭から集めてきたものらしく、花の姿がいかにも自然なところが多い。ここでは毎朝一日分ずつ買うことにして、旧市街のエジプト・バザールの横の植木市へと向かい、主材になりそうな鉢物、買っておいても傷まない鉢植えの花を探した。

この露店市は幅15mほどの道の両側に雑壇を作って、小さな鉢植えの花から庭木まで売っているのだが、鉢がせり出して通り道は5mほどしかない。人に押されながら、かなりの量を買わなければならない。私達は上客なのか、値段の交渉がはじまると、どの店でも、いつどこへ注文するのか必ずチャイ(トルコ紅茶)を出される。雑踏の中で交渉だが、チャイを飲みながらだと不思議に和やかな話し合いになってしまふ。隣でも大きな糸絆の鉢をはさんで、店主と客が何か世間話をしているような調子で、お互いの納得のできる値段をきめているようである。ゆっくり話し合った末に、お互いに満足できる値段がきまったくらしい。

トルコ人は商売は楽しんでやるべきだと考えているようである。売り手が最初にきり出るのは、その品物の価格はこれぐらいであってほしい、という理想的な金額らしい。それを客に伝えた時点から、実際にはどれぐらいの金額であるべきかの現実論に入っていく。お互いの立場を考慮し合って話が進んでいる様子は、言葉がわからなくても何となく感じられるものである。

私達もその雰囲気に包み込まれてしまったのか、チャイを飲みながら至極楽しく花を揃えることができた。

薄暗くて広い部屋の中から深い出窓を通して見える外の新緑は、今まで感じたことのなかったような清々しさである。ここはシュレイマニエ・モスク(イスラム寺院)の給食所で、昔は貧しい人々にここで食事が与えられた。無料給食所というと寒々としたイメージしか持っていないが、こんな立派な施設が16世紀に作られていたのである。

内部は古びた色の漆喰壁で、天井はドームになっていて、あっさりしたモザイクタイルが幾何学的な花模様に貼られている。王宮のくどいほど華麗な室内とくらべると、簡素すぎるほどあっさりした内部装飾だが、私達にはこんな部屋のはうが落ち着きがいい。私は佗、寂にあまり好感を持っていないが、それでも王宮よりも、この給食所のほうにやすらぎを感じるのは、やはり日本の環境の中で感受性が育ってきたからなのだろう。

この給食所は現在レストランになっているが、昔の雰囲気はこわされていないらしい。椅子やテーブルは新しいものだが部屋に合わせた木地仕上げなので感じがいい。そして出窓や壁の所々に古い調理器具が飾られていて、それがいかにも本格的な、オスマン・トルコの宫廷料理を出す店らしさを演出している。

私達は、夕食の準備のために店を閉めている時間を利用させてもらったのだが、気持ちよく貸してくれた銅の調理器具は、買って帰りたいほど良いものだった。

TURKEY

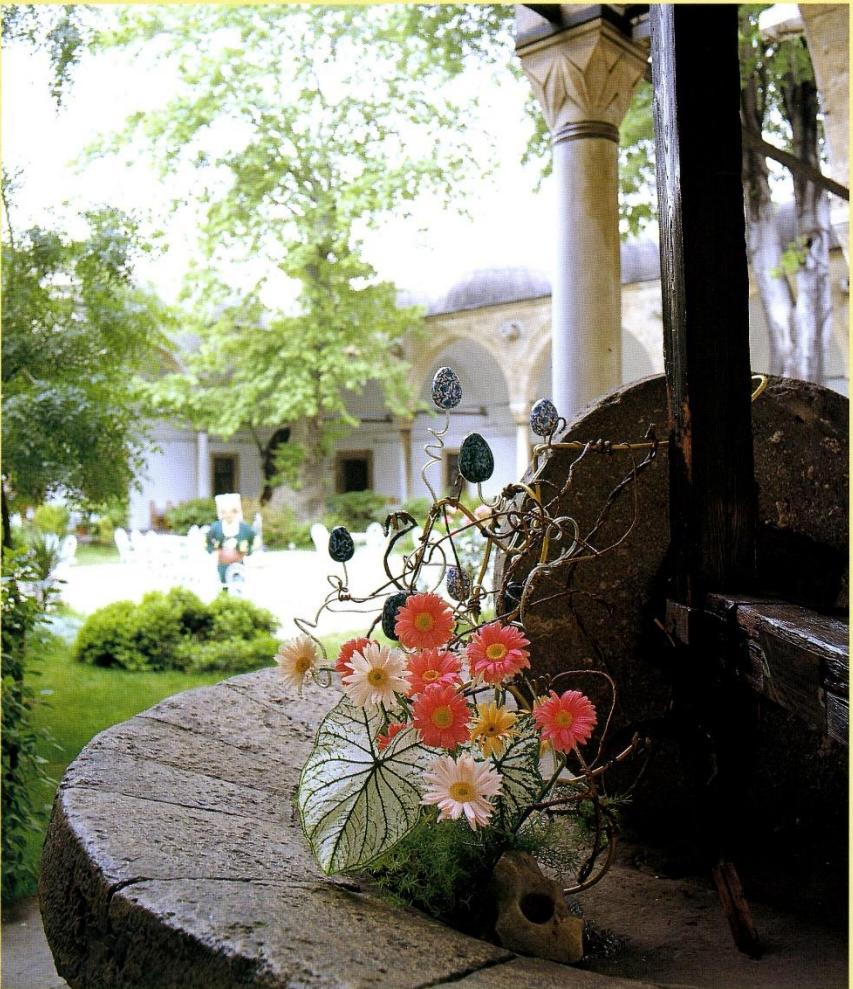
Istanbul



●素子 1995年5月22日
シュレイマニエ・モスクのレストラン(イスタンブル)
■花器／銅鍋 花材／透かし百合、蜀黍 卓／盛器
「ISTANBUL/MOTOKO, MAY.22, 1995」



●仙溪 1995年5月22日 シュレイマニエ・モスク(イスタンブル)
■花器／石 花材／ガーベラ、カラジューム、アスパラガス、卵形陶器、茎
「ISTANBUL/SENKEI/MAY,22,1995」



istanbul



TURKEY

トルコ人は誇り高い民族である。それもその筈で16世紀の大オスマン・トルコ帝国はギリシア、アルバニア、ブルガリア、ボスニア、ルーマニアなどの東欧諸国、アラビア半島の大部分、エジプト、アルジェリア、チュニジア、リビアなどの地中海の東岸と南岸のほとんどを領有していたのである。

トプカプ宮殿の宝石を主とする莫大な財宝や、代々の王達が建てた巨大なモスク(イスラム寺院)のドームやミナレット(尖塔)が旧市街の丘を覆っていても、そうあって当然の国力だったのである。

中央アジアの遊牧民族は、有史以来常に中国の歴代王朝を圧迫し続けるだけでなく、西へも勢力圏を拡げていった。西進に成功し、アナトリアを占領したのが現在のトルコ人で、祖先は中央アジアの突厥だそうである。そしてここを基盤にして、13世紀にオスマン・トルコ帝国が生まれる。15世紀には、4世紀以来ビザンチン帝国(東ローマ帝国)の首都だったコンスタンチノープルを攻め落としてイスタンブルと改称し、オスマン・トルコ帝国の首都として、ビザンチン時代より更に繁栄し、裕福な都市へと発展していくのである。

トルコ人は日本にかなり好感を持っているようである。も



●仙溪 1995年5月22日 ブルーモスクを背景に(イスタンブル)
■花器／銀茶器 花材／無花果、アンスリューム
「ISTANBUL/SENKEI/MAY,22,1995」

ともと日本人と同じモンゴロイドだったせいかもしれない。だが顔つきや体格は似ていない。移動のはげしい騎馬民族の突厥は、行く先々で国際結婚を繰り返しているうちに、現在の顔になったのだそうである。ところが面白いことに、先祖の血は争えないもので、トルコの赤ちゃんの80%は、日本人や中国人と同じように、お尻に青い蒙古斑をつけて生まれてくるそうである。

トルコ航空でイスタンブルに向かうとき、ドバイを経由してシリア砂漠を通りすぎると、下の風景は所々雪の残っているアナトリア高原に変わる。ここがオスマン・トルコ帝国を築き上げた、小アジアとも呼ばれるアナトリアなのである。

ハンガリー、ギリシアから中近東にかけての地域は、時代によって複雑に民族と国境が変わる。それによって宗教や文化も変わっていくので、実際にこの目で見ても、それがどの文化を代表するものだったのか、わからずに帰ってくることになる。

日本人にとって、全くの異文化と少しだけ同根の文化が入り交じった興味深い国々なので、学校で習った世界史をもっと覚えておけばと感じるのが中近東の旅である。

イスタンブルの市街は、金角湾^{ヒリヤツキ}をはさんで新市街と旧市街に分かれている。

金角湾に架かっているガラタ橋から旧市街を眺めると、東の端にトプカプ宮殿^{トプカプ}がある。そのすぐ西側からアヤ・ソフィア、ブルー・モスク、シュレイマニエ・モスクと続いて、大小いくつものドームとミナレットが間をおかないで建ち並んでいる。

夕方になって、その姿が赤い空にくっきりと浮かび上がる。ヨーロッパのどの都市にも見られない景観であることが心に深く刻み込まれる。この街はキリスト教一色に塗りつぶされたヨーロッパの一角に食い込んだ、唯一のイスラム都市なのである。もしこの街が、15世紀にオスマン・トルコに征服されず、現在までギリシア正教(ビザンチン教会)の総本山コンスタンチノープルであり続けたら、こんなに人々の興味をそそる都市にはなっていなかつたのではないだろうか。

トルコへは初めての旅だったのだが、空港から旧市街を通ってホテルまで行く道で、目に見える市街の建物や市民だけでなく、匂いまで違うと感じるヨーロッパの都市の匂いでもなく、香港やバンコクの匂いでは勿論ない。

旧市街はイスラム寺院に埋めつくされているように見えるが、市民の表情は他のイスラム圏よりも柔らかく明るい。中央アジアが故郷だといっても、それはすいぶん昔の話である。そうとはわかっていても、出会った人達のどこかに私達との共通点はないかと探しはじめてしまう。だが私にわかつたことなど殆どない。わかったのはモスクには花をいけて供える習慣がないという相違点と、日本の商社の支社長が連れていってくださったレストランで鯨の塩釜(魚のまわりを分厚く塩でかためて焼く料理)が出たという、料理の共通点ぐらいのものである。

この国のイスラムは、異教徒に対してかなり寛容らしい。観光客に人気の高いブルー・モスクでも、観光客の一団がガイドの説明を聴いている横で、教徒が何か祈っている。私もブルー・モスクでは非一作いけたかったので、通訳のベンベ

さんを通じて事情を説明すると、そういうことなら2階の回廊は婦人用になっていて観光客は入れていないので、そこならゆっくり仕事ができるでしょうと、寺務所まで鍵を取りにいって場所を提供してくださった。

ブルー・モスクという名は観光用の通称で、スルタン・アフメット・ジャミイという名が正式名である。1616年に、当時26歳にすぎなかったアフメット1世が建造したのだそうだが、ブルー・モスクより古い寺院は京都にいくらもある。その上、美術的にも価値の高い寺院が多いが、これほど壮大な寺院は京都にはない。壁面は2万1000枚のチューリップの模様を主にした、トルコ産の青いタイルが貼られているので、ブルー・モスクと呼ばれるようになったのだそうである。

2階の回廊へ、小さい扉を開けて螺旋階段を上がっていくのだが、創建以来500年の間、どれだけの女性がここを上り下りしたのか、階段の石はえぐられたようにすり減っている。回廊は幅5mほどで、一面にトルコ絨毯が敷きつめられている。最高級のものではないのだろうが、本物であることは確かなようである。

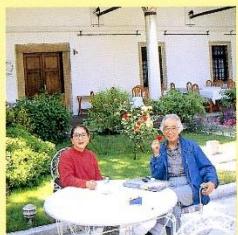
前日に作った立花を置いてみると、どうやらこの雰囲気に合っているようである。真と諱に使った枯枝は、焼印で蛇の鱗の模様がつけられているが、イスタンブルの花屋で見つけたのを利用した。ここでも先代遺愛の立花瓶を使わせてもらったが、まさかこんな所で写真におさまることは思ってもいなかつたことだろう。

ブルー・モスクの前ではもう一作、素子の投入を撮影した。トルコの細密画では、孔雀が描き込まれていることが多いので、その羽根にストレリチアを取り合わせたのである。

トルコはアジア色の濃い国だといわれてはいるが、明治に開国した日本は、それ以来西欧文明を取り入れ続けてきたために西欧文化に慣れてしまっている。そのためだろうか、縁続きかもしれないこの国のほうが、私達にとって遠い国になってしまったようである。

そう思うとこれからも時々出掛けみたい国である。

TURKEY Istanbul





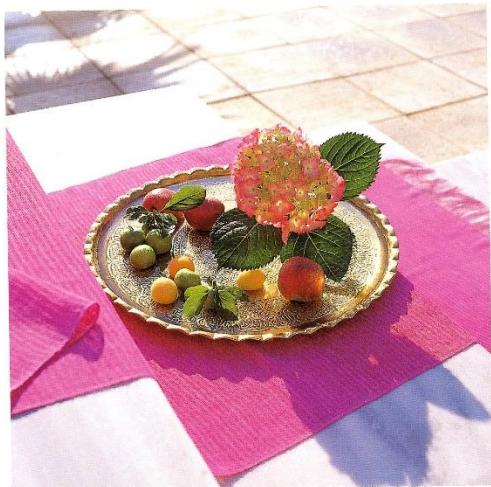
●美子 1995年5月24日 シュレイマニエの墓地(イスタンブル)
■花器/大理石コンポート 花材/バラ、紫陽花、金網
『ISTANBUL/MOTOKO/MAY.24,1995』



●仙渓 1995年5月24日 シュレイマニエの墓地(イスタンブル)
■大理石コンポート 花材/ギンギ、マリーゴールド
『ISTANBUL/SENKEI/MAY.24,1995』



●仙渓 1995年5月23日 カーラ教会通り(イスタンブル)
■花器/銅壺 花材/アナス、斑入りベンジャミン
『ISTANBUL/SENKEI/MAY.23,1995』



●素子 1995年5月25日 ホテルの庭で(イスタンブル)
■花器/真鍮トレイ 花材/紫陽花、プラム2種
『ISTANBUL/MOTOKO/MAY,25,1995』

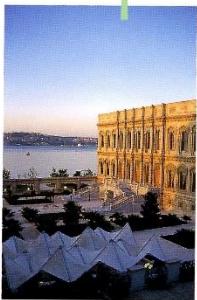


●素子 1995年5月24日 ブルー・モスクの前広場(イスタンブル)
■花器/水差 花材/ストレリチア、スタークチス、孔雀の羽根
『ISTANBUL/MOTOKO/MAY,24,1995』



TURKEY

istanbul



●素子 1995年5月25日 ホテルの庭で(イスタンブール)
花器／トルコブルーの陶器
花材／ゼラニウム、梅花空木
『ISTANBUL/MOTOKO/MAY.25,1995』



仙美 1995年5月25日 ブルーモスクの女性祈禱所(イスタンブル)
花器 立花瓶 花材 アナス、五葉松、枯枝
「STANBUL/SENKEI/MAY.25,1995」



●素子 1995年5月27日 スフィンクスとカフラー王のピラミッドを背景に(ギザ) ■花器／素焼彩色壺 花材／立葵、海綿
『GIZA/MOTOKO/MAY,27,1995』

遙かに広がる砂の大地とピラミッド。エジプトへの旅は
植物を受けつけない灼熱の大地と、ナイル川がもたらした豊かな緑地の
対比に、畏敬の念すらを抱かせるものであった。
そして見知らぬ土地での予期せぬ出会い。旅の楽しさはここにある。

EGYPT

Giza,Cairo,Nile,Luxor



ギザのピラミッドは5000年もの間、身動きもせざカラカラに乾いた砂の上で暮らしている。“砂上の楼閣”という言葉はピラミッドにはあてはまらないようである。

私達日本人にエジプトの風景は、異様すぎる。すぐ近くのカイロの街はずれまでは庭木も茂って、草花も機嫌良く咲いているのに、いきなり砂地になって、そこから砂漠がどこまであるのか、気の遠くなるくらい続いているのである。

砂漠は海にたとえられることもある。オアシスが陸地で、そこから駒鹿のキャラバンが砂漠への航海に出ていくのだというのだが、やはり違う。南太平洋までの船旅に誘われたなら喜んでお供するが、キャラバンの旅に加わるよう勧められたら、丁重にお断りしてしまうだろう。

ピラミッドの前まで来ると、どんな人でも暫くは見入ったまま言葉が出ないことだろう。

案内してくれたワイル君は、ピラミッドの中へ入って玄室(王の石棺がある)を見てくるべきだという。

私達は明日の撮影位置をきめるため、3基のピラミッドのぐるり一周してみたい。どうしようかと話し合っている間に、素子は物売りにターバンを貰わされてしまった。

勧められた玄室にも入ったあと、市内に戻って花屋を見てまわったのだが、カイロはイスタンブールより更に花が少ない。古代の壁画には青い睡蓮が必ずどこかに描かれているので、睡蓮ぐらいは今でも売っているのかと思っていたが、全く見当たらない。花屋も所々にあることはあるのだが、しおれかけたような薔薇と、細いグラジオラスぐらいしか並んでいない。素子は花屋に見切りをつけて、明日は早出して、スフィンクスの近くの店に咲いていた立葵を切らせてもらうことにするという。彼女はそういう交渉が大変上手である。

翌朝、花を切らせてもらっただけでなく、貴重な水まで、そのレストランの主人に提供してもらってきたのが、この一作である。

遙かに広がる砂の大地への供花でもあるか。



●素子 1995年5月27日 イスラム地区の墓地（カイロ）
■花器／銀象嵌瓶、花材／ニチニチソウ、緑紅井草
『CAIRO/MOTOKO/MAY.27,1995.』

古代エジプトの支配階級の邸宅では^{なつめ子}や葡萄が植えられ、尼イから水をひいた池の中には睡蓮が咲き、庭にも様様な草花が植えられている様子が壁画として残っている。

その絵の中には来客に花束を贈っている場面もあり、別の壁画には宴会の席で、来賓の女性が手渡された睡蓮の花を持っている絵もある。今から4500年ほど昔のエジプトには、そんな優雅な生活があったのである。

だが日干し煉瓦で作られていた古代の邸宅は、今は跡形もない。未だに日干し煉瓦（泥煉瓦といったほうがいい）で造られているのは、田舎の小さな家だけになっている。

この泥煉瓦で面白い話を聞いた。ルクソールの対岸には、王家の谷や幾つかの神殿がある。その近辺には代々遺跡の盗掘を職業にしている泥煉瓦の家の集落があって、警察の後々の立ち退き勦告にも全然応じていなかった。ところが私達がルクソールに行く前日までの2日間、本当に珍しいことに大雨が降って、彼らの家が溶けて流れてしまったのである。警察は雨が泥煉瓦を退治してくれたと大喜びだそうである。

だがその雨で私達もひどい目にあった。

素子はカルナックの神殿の参道で、羊のスフィンクスの列を入れたいい写真ができたので、私もと神殿の裏側にまわるといい場所があった。第十ピュロン（石造りの巨大な門）の前なのだが、しかしあたりに異様な臭気がたちこめている。そのあたりには家畜小屋か人の住居か区別のつかない建物が密集していて、駱駝や驢馬が沢山いる。ルクソールは年間降雨量がゼロに近い所である。何百年間もの家畜の排泄物が地中深くしみ込んでいたけれど、乾燥してて臭わなかったのだが、それが雨で溶け、天気になったこの日、蒸発はじめたのである。第十ピュロンの花は、息も絶え絶えていけ上げた一作なのである。

カイロのイスラム地区に行く途中、高速道路の東側に南北800m、東西300mほどの、スラムか廃墟のような気味の悪い一画がある。聞いてみると墓地だそうで、小型化した民家かモスクのようなものが、10~20坪の敷地の中で隣に囲まれている。すべて灰色の日干し煉瓦で作られているが、崩れかけているものもある。

暫く車を止めて眺め、思案していたのだが、行ってみようときめて墓地に入ってみると広い道が通っている。住んでいる人もいるようである。

ゆっくり車で走っていると、所々に人がかたまって私達を見ている。一ヵ所だけ白い長い堀があつて、鉄格子の門からのぞくと、中は整然としててしっかりした番人もいる。素子がここで一作撮らせてもらえないだろうかというので、番人に話してみると、といっても手真似なのだが、どうやら通じてOKだという。アラビア文字で書かれた銘板の下に英語で付記された部分を読むと、エジプト陸軍の墓地らしい。

素子がいっている間、恐る恐る通りに出でみたが、あたりにいた人達は私を気にしていないらしく、物騒な所ではなさうである。

陸軍墓地の周囲は高速道路から見えたお墓より立派そうで、日干し煉瓦の高い堀で囲まれている。中をのぞいてみると、1区画は100坪から200坪ぐらいあって、墓守の家まである。



EGYPT Cairo

私達を遠巻きに見ていたのはその家のらしい。今まで見たこともない変わった墓地なので、ここでも一作撮ってみたいと思い、手真似で陸軍墓地でやっていることをここでもできないだろうかと交渉してみると、喜んでどうぞということである。はじめはお墓の上に置いた花だけのつもりだったが、墓守のおじさん達も入ってくれないかと頼むと、これもまた大喜びで引き受けてくれた。謝礼を意識しての上のことかもしれないが、楽しそうにモデル役をつとめてくれたお蔭で、思いがけない一頁ができた。

エジプトには古代の壮大な遺跡はあっても、エジプト風の民家でいいものは少ない。枝物の花材を切らせてもらったナイル川沿いの植木屋の対岸の島に、一軒だけ優雅な家が見える。日干し煉瓦建てではなく、白い花弁形のアーチで囲まれていて、2階はドーム形の屋根になっている。

行って駄目でもいいから、あの島に渡ってみないとガイドのワイル君に相談すると、では明日ファルーカで行きましょうということにきつた。ファルーカというのは古くからナイル川を行き来しているエジプト型のヨットで大変乗り心地がいい。島に着いてみると対岸で見ていたよりもはるかに良い家で、家屋から川岸まで広いテラスでアーチに囲まれている。家の東側には高さ15mくらいの椰子の木が植えられていて、庭には炎台桃やアイリスが咲いている。

川岸には布袋草が浮かんでいて、茎のしっかりしたシベラスも自生している。用意してきた花材より、その辺に咲いている花のほうがよさそうである。ふたりで一作ずつつけたのだが、この優雅な邸宅は古代のエジプト風ではないにしても、その時代の生活のどこかを伝えているようである。

カイロのイスラム地区のハーン・ハリーリの細い路地。ここで撮った写真には、16世紀に造られたバデスタン門も入っている。短い滞在でこの5000年も年を経たエジプトのことがわかる訳もないが、無心に花を咲かせていると何かを感じ取っている。私達はわかることより感じる旅でありたい。

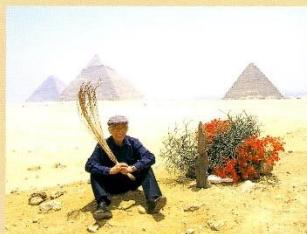
カイロからルクソールまでの空路1時間は、ナイル川の上を飛んでいく。下を見ると、川に沿って緑の帯が広い所で1kmぐらい。狭い所では200mもなさそうぞ、緑地と砂漠はくっきりと分かれている。よくこんな国上で世界最初の大文明が育ったと思うような、心細い風景である。

地図を見ると、カイロの中心から10kmほど離れたギザのピラミッドは、緑地の部分に入れられている。ということは実際に緑地の筈だが、ピラミッドはカイロ郊外の緑地から少し離れた砂漠の中に入っている。そしてカフラー王のピラミッドの東側700mほどの場所には、河岸神殿という遺跡がある。何故ナイル川から10kmほども離れた所に、河岸と名のつく神殿があるのか不思議に思っていたが、聞いてみると昔は夏の増水期になると、このあたりまでが水没して広大な湖になっていたそうである。そして水のひいた季節に農耕を行うのだが、増水期に上流から流れてきて堆積した肥沃な泥土が、稔り豊かに農産物を育てたということである。

機上から眺めたナイル川沿いの心細い緑の帯は、つい100年ほど前までは冬には広がり、夏には増水してピラミッドのすぐ近くまで水が押し寄せて、湖のような水面になっていたのである。ピラミッドが建てられた当時、その表面は化粧石で輝き、その姿を水に映していた景観を想像してみたい。

この眞の写真だと、増水期には左のピラミッドの脇のほうに細く水面が輝いていたのだろうし、現在のカイロ市街はイスラム地区の北側の高台あたりにまで水面が広がっていたのだろう。

ナイルの景観は、今世紀初頭にアスワンダムが完成したことによって一変してしまったのだそうである。



Giza EGYPT



●仙溪 1995年5月27日 ピラミッドを望んで(ギザ)
■花材／ユーフォルビア・ティルカリ、鳳凰木、樹木化石
『GIZA/SENKEI/MAY.27,1995』



●仙溪 1995年5月27日 イスラム地区の墓地(カイロ)
■花器／真鍮鏡象嵌深鉢 花材／ストレリチア・オーガスタ、小菊
『CAIRO/SENKEI/MAY,27,1995』



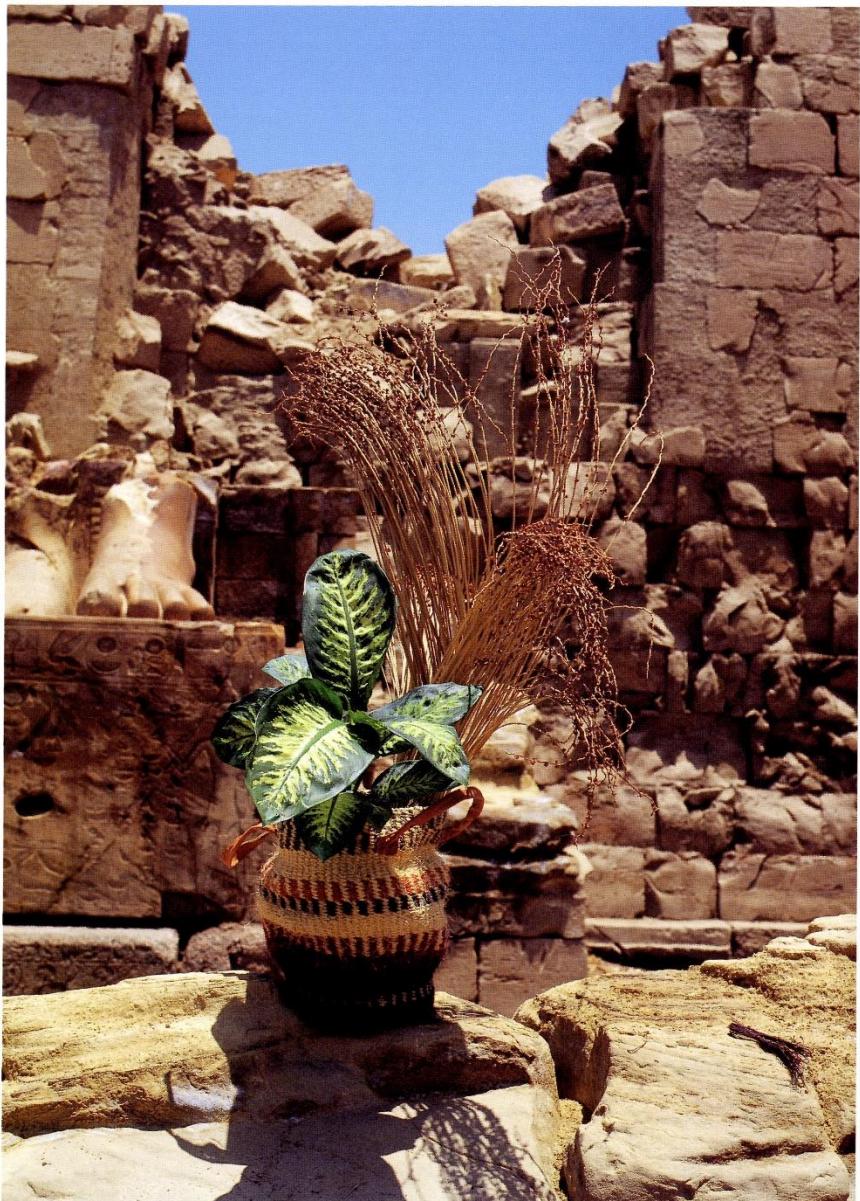
●栄子 1995年5月28日 ナイル川の島(ナイル)
花器／銀の水差 花材／夾竹桃、太蘭
『NILE/MOTOKO/MAY,28,1995』



84



仙溪 1995年5月28日 ナイル川の島(ナイル)
花器／銀トレイ 花材／シベラス、布蕊草
『NILE/SENKEI/MAY,28,1995』



●仙溪 1995年5月29日 カルナック神殿の第十ピュロン(ルクソール)
■花器／民芸籠 花材／帽子の花梗、ディエフエンバキア
『LUXOR/SENKEI/MAY,29,1995』



●素子 1995年5月29日 カルナック神殿参道(ルクソール)
■花器／羊形陶器 花材／縁紅弁慶草、バビルスの筒
『LUXOR/MOTOKO/MAY,29,1995』

Luxor EGYPT



●菓子 1995年5月28日 バザール(カイロ)
花器／籠草盆 花材／クロトン、木の実、菊
『CAIRO/MOTOKO/MAY.28,1995』



●仙臺 1996年5月26日 古い城門と跳橋を背景に(オランダ デルフト) ■花器／デルフト焼花瓶 花材／向日葵 2種
THE NETHERLANDS, DELFT/SENKEI/MAY.26,1996

EUROPE

THE NETHERLANDS: Delft, Amsterdam, Leiden
GERMANY: Köln SWITZERLAND: Genève, Montreux

デルフトの運河は、この古い城門のあたりで直角に曲がって、デルフトの中心部に通じる細い運河と合流している。白い跳橋は上がったり下がったりし、岸辺に水鳥が巣を作っている。絵に描いたようなオランダの風景である。

それもその筈で、この城門を右端に描き込んだ絵画がフェルメールの作品にある。フェルメールは17世紀にこのデルフトで生まれ育った人だが、その作品には人物画が多く、その絵が彼の数少ない風景画のうちの傑作だということである。

13世紀に作られた城門は昔そのままで残っているし、街の併まいは17世紀のフェルメールの時代と殆ど変わっていない。

京都は1200年の古都だというが、残っている古建築は神社仏閣だけで、町家で100年以上生き長らえている建物は僅かなものである。

ここで買ったばかりのデルフト焼の花瓶に、向日葵をいけていると、通りかかった上品な老婦人が「まあ、向日葵と跳橋、ゴッホの絵じゃないの!」と嬉しそうに声をかけてくれた。別にそんなつもりで背景と花材を選んだわけではなかったのだが、いわれてみると、ゴッホの“向日葵”と“跳橋”的2作を一つにしたような不思議な变成了ったようである。

素子は街中に通っている岸の低い運河が気に入ったらしく、対岸には古い家が並んでいるが、11世紀にできたこの街は16世紀の大火で殆ど焼けたので、現在はそれ以後の建物が大半を占めている。といっても200年以上昔の家が多い。

93頁の運河の左側の家はあまり大きくはないが、その古色が住んでいる人々の落ち着きと豊かさを感じさせている。川岸に建てられている家もあるが、川岸が庭になっている家もある。その一軒に大きく茂った白紫陽花が咲いていた。素子は旅立つ前からオランダとシーボルトに縁の深い紫陽花をいけたいといっていたが、それがこのデルフトの街で叶ったのである。



薰風わたる爽やかなヨーロッパでの“花ふたり旅”。
オランダの運河に、ドイツの古い街並みに、そしてスイスの大邸宅に。
野にも街にも花々は咲き競い、私達も負けじと花をいけた充実の日々。
それは多くの人々の温かな心遣いに支えられた日々でもあった。

オランダは世界の花卉市場を支配している国である。スウェーデンやドイツに行っても、ニューヨークのフラワー・ディストリクトに行っても、必ずオランダの花のケースが積み重ねられている。日本でも大きい花屋は勿論、品数の多くない小さな店にも、オランダから輸入された花が少しある。置かれている。

このように大量に輸入されるようになったのは、10年ぐらい前からだったと思う。その頃、日本ではあまり作られていないかった大きくて華やかなチューリップや、今では有名になったカサブランカ（大輪の白百合）が売られはじめた。

これらの花は美しい上にボリュームもある。だが実際に見てみると、茎が弱くて葉も勢いのないチューリップ、花が大きすぎてだらしない格好のカサブランカが日本でいつまで売れるのかと疑っていた。しかし驚いたことにオランダは、いけばなの国日本にフラワーデザインというノウハウまで持ち込んで、輸出先を確保してしまったのである。

世界最大の花の輸出国、その首都のアムステルダム。そこで花をいけるというと、立派な花屋が沢山あって、どんな花でもたちどころに揃うだろうと思っていたのに、そんな店は見当たらない。それならということで行ってみたのが、花の露店商が並んでいるシングル通りである。この花屋通りは、古くから運河を伝て近郊の農家で集めた花が売られている気楽な一画で、市民が家庭用の切り花や鉢植えを買に来る所である。売られている花はアムステルダムの人達には身近で親しみ深いものばかりである。ただ少し時季がおそかったのでチューリップの種類が少なくなっていたのは残念だった。

アムステルダムは、1本の通りに必ず運河が1本並んでいるような街である。私達の泊まっていたホテルも運河沿いに建っていて、両岸に大きく枝をひろげた大木の若葉が水面を覆い、対岸の古い石造りの家も、若葉の緑に染められた水面に絵のように映し出されている。

アムステルダムの市内にも跳橋が多い。混雑した道をトラックで運ぶより、静かで運んだほうが便利なのだろう。船の往来がかなり多いので、写真を撮っている間にも跳橋は3度ほど上がって、ゆっくりと静かに通っていった。跳橋を背景にした素子の盛花に使った楓は“青枝垂”という品種で、日本から盆栽として輸入したものだと花屋がいっていた。日本では盆栽の仲間に入れてもらえないような鉢植えだが、これぐらいの枝振りがいけばなには丁度いい。この日は月曜日だったが人通りは多い。立ち止まって眺める人が、邪魔にならないように気を使ってくれるのがありがたかった。

市街は半円形の蜘蛛の巣のように運河が通じているが、市外に出てもやはり運河や掘割が道路網のように通じ合って、広い農地や牧場も掘割で区切られている。

そして地面は周囲の水面より50cmぐらい盛り上がりがっているだけで、どこまでも起伏のない緑が遠く地平線まで続いている。私は何となく落ちつかない風景である。どこに行っても山が見えて、川が流れているのが日本の風景である。ところがここでは岡もなく山もない。緑の絨毯を果てしなくひろげたような平野は、美しいかもしれないがなじめない。ナボレオンはこの国の地形を「オランダは、フランスの川が運ぶ

THE NETHERLANDS Delft EUROPE



土砂でできた国」といったそうだが、地図でフランスの川の流れをたどってみるとなるほどそうかもしれない。

そんなどっ広い細地の中に、アクセントのようにぽつんと立っているのが風車である。250年ぐらい前の古いものもある。ライデンに行く途中で、それらしい風車があった。近くの農家の若奥さんに米歴を聞いてみると、19世紀の初めに建てられたものだそうである。

近くの牧場の柵にマッケム焼の花瓶を括り付けて、いけはじめたのはいいが、さえるもののない平地を吹いてくる強い風で花が吹き飛ばされそうになる。1回シャッターを切ることに形を直しながら撮ったのが運河と風車の写真である。花材のチューリップは先程の農家の咲き残りをいただいたものの、菜の花も通り道に咲いていた。細い枝は背景の木立の中の枯木である。その場で寄せ集めていた投げ、野道のお地蔵さんに供えた花のよう見える。

● 毛子 1996年5月26日 運河の畔（オランダ・デルフト）
花器／デルフト焼花瓶 花材／紫陽花2種、バラ
「THE NETHERLANDS, DELFT/MOTOKO/MAY,26,1996」





●仙美 1996年5月27日 ホテルの中庭(オランダ アムステルダム)
■花器／中国七宝焼深鉢 花材／カラー2種
THE NETHERLANDS, AMSTERDAM/SENKEI/MAY,27,1996.

THE NETHERLANDS
Amsterdam EUROPE



●美子 1996年5月27日 滞河の畔(オランダ アムステルダム)
■花器／中国七宝焼深鉢 花材／橘、石榴花
THE NETHERLANDS, AMSTERDAM/MOTOKO/MAY,27,1996.

EUROPE
THE NETHERLANDS
Leiden

●仙溪 1996年5月27日 牧場(オランダ ライデン)
■花器/マックム焼花瓶 花材/チューリップ、菜の花、枯枝
『THE NETHERLANDS, LEIDEN/SENKEI/MAY.27,1996』





GERMANY Köln EUROPE

子供の頃、外国人の多い神戸に住んでいたが、ヨーロッパ系ではイギリス人とドイツ人が多かった。近所にドイツ人の家が4軒あって、その1軒の家の子供と友達になった。

アクセル・ベルゲルという名前でおとなしい奴だったが、私が小学校6年生の頃、進学のためドイツに帰っていった。その後お母さんから、アクセルはヒットラー・ユーゲントに入ったと聞いた。

ずっと思い出すこともなかったが、12~13年前はじめてのドイツへの旅で、飛行機が降下しはじめて雲の中を飛んでいるとき、ふと彼の思い出が甦ってきた。

もし彼がヒットラー・ユーゲントに入っていたとすると、少年兵として戦闘に参加して死んでしまっているかもしれない。生きているとしたら今頃どんなオジサンになっているのだろうと想像していると、急にドイツが身近な国のように思えてきた。

この十数年間、毎年のようにドイツに来ている。デュッセルドルフに滞在することが多いのだが、すぐ近くのケルンへも大型堂を見にきて、塔のてっぺんまで登ったこともあった。大型堂は着工されたのが13世紀、内陣が14世紀にでき上がり、最後に157mの塔が建って、この大建造物が完成するのは19世紀になってからのことである。

なんと一つの建築様式が600年もの長い間踏襲されてきたのである。ゴシック建築を代表するこの大型堂の尖塔を見上げていると、ニューヨークのエンパイア・ステート・ビルが何となく間の抜けた建物のように思えてくる。

ケルンの歴史は、2000年以上昔のローマの植民都市としてはじめましたが、第二次世界大戦で市街地の70%が破壊され、文字通りの瓦礫の山となってしまった。敗戦後の報道写真でその有様は見ているが、日本の木造都市が焼夷弾で焼きつくされたのと全く様相が異なっている。石造家屋の石と煉瓦が崩れて山になっていたのを、ケルンの市民は元通りに復興して古都の面影を守ったのだそうである。600年もかけて大型堂を完成させた市民には当たり前のことだったのかもしれない。



●素子 1996年5月29日 ドイツフー橋の欄干にて(ドイツ ケルン)
■花器／四本柱形花瓶、花材／ガーベラ、デルフィニューム
『GERMANY, KÖLN/MOTOKO/MAY,29,1996』

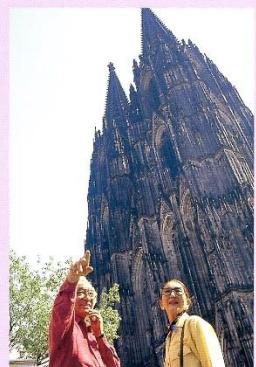
アムステルダムから空路フランクフルトへ。そこからケルンまで鉄道を利用すると、列車はライン川の左岸を川沿いに走る。フランクフルトを出てマインツあたりから険しい丘が川にせりだしてきて、川を見下ろす丘の上に建てられた中世の城や、街の古びた教会の尖塔を何分かおきに通りすぎてゆく。途中ローライの岩場が対岸に見える筈だから、と素子に説明している間に通りすぎてしまった。

マインツからコブレンツまでのライン川下りのハイライトを通って、3時間ほどケルンに着く。ケルンの駅は、すぐ横に大聖堂があるのでいつまでも賑やかである。丁度京都駅前の京都タワーのあたりに、観光客のお目当ての大聖堂の尖塔が聳えているのだから、暇つぶして当然のことである。

この街に来て、いいなと思うのは市民が古都の景観を大切に守っているところである。戦争で市街の70%が破壊された場合、京都ならどのような復興の仕方をするのだろう。おそらく昔の面影をとどめない新建築で覆いつぶされるのではないかと思う。昔は京都へ来るときの典雅な目印だった東寺の塔も、今では存在感がうすれてきている。

ドイツツィーア橋の上から北西の方向に、右に聖マルチ大教会の塔、左に大聖堂の塔が見える。手前には三角屋根の家が並んでいるが、1、2階は全部ライン川沿いのレストランである。素子の狙いはこの橋の上だったのである。ガーベラとデルフィニュームをいけた花器は、この背景を考慮に入れてケルンの街を探し歩いて見つけたらしい。ステンレスの厚板に4本の陶器の筒がしっかりと固定された創作花器で、裏にサインも彫り込まれている。

GERMANY Köln EUROPE



これを橋の欄干の上で使いたいというので、おそるおそる和則と二人で針金で縛りつけ、その上をリボンで化粧した。これなら安心ということで素子は機嫌良く受けた。いけ終わったのは午後の7時半だが夏時間なのでまだ日は長い。松尾さんと和則は目の前に見えるレストランのドイツビールが気になっていたのか、片付けがいつもより早かったようだが、綺麗な小品花がいけ上がった。

大聖堂の北側の扉の前で使った花器は、紀元前3世紀頃のメキシコの彩色土器だと、買ったアムステルダムのギャラリーの店主は鑑定書をつけてくれた。もし本当にすると、ケルンがローマの植民都市になる少し前の年代である。

ケルンには駅の構内に良い花屋がある。種類が多くて新鮮な一級品が揃っていたので、滞在中はこの一軒だけ事足りたのが有難かった。ドイツは古くから徒弟制度で成り立ってきた。花屋でもマイスター（師匠・親方）がデザインしたフラワーデコレーションを弟子に作らせて売るシステムになっている。そこで一定の期間、訓練を受けて花に関する技術を修得し、花のエキスパートと認められた者がフロリスト（花職）の資格を与えられるのである。その歴史は現代にも受け継がれているようである。日本の花屋もだんだんそれに近づいてきているようだが、ヨーロッパのフラワーデザインを主にした花屋とは違って、いけばなを基本においた専門家としての花屋が育てほしいものである。

ドイツ人は一日中ビールを飲んでいるらしい、と何かに書いてあった。だが昼酒組は少數で、実際には仕事を終る4時過ぎからビアホールやレストランが混みはじめる。その頃になると店に入りきらない客が、店の外まで溢れて気楽そうに立ち呑みしている。私の時間感覚では、まだ日の高いうちからというふうに思ってしまうが、5月からの夏時間の4時は、日本ではまだ3時。そして土曜日はどこ会社も休日なので、遊べる時間は日本よりうんと多い国なのである。

素子がユーモラスな宿のポットに花をいけていた通りの両側は、壁の色がいい。少し派手な色かもしれないが、焦げ茶色の窓枠が赤と黄色を抑えている。たまたま1軒だけ奇妙な家のもあるが、そんな家でも通り全体としては、あまり違和感は強くない。隣の家の窓ガラスが汚れていたら、きれいに拭くように注意しにいくのがドイツ人だから、街並みにそぐわないような色は近所の人達が抑え込んでしまうのだろう。

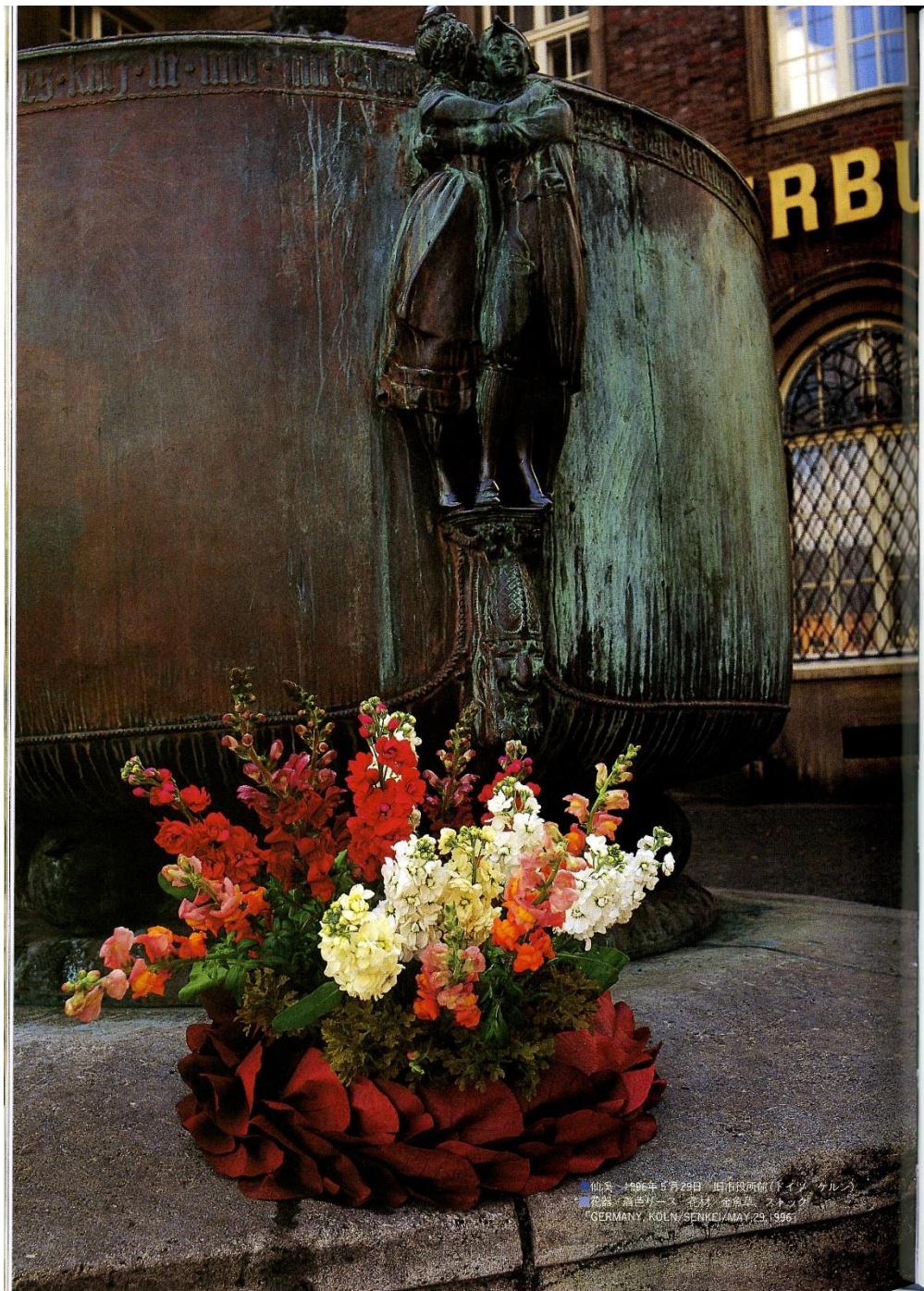
ライン川を渡って東に向かうと、ヴァッパー川上流の山の上にブルグ城が建っている。ここは素子の友人のウルスラさんが教えてくれた12世紀の古城で、ケルンやデュッセルドルフの人達が、休日に山歩きに出掛けてくる所だそうである。

素子の撮影が終わったのが夜の8時前、私の黄薔薇を振りおえたのはもう9時近かった。ぼんやりとしか写っていないが、物見櫓の時計は8時40分を指している。お客様は私達だけになってしまった。山頂の古城で遙か彼方の平野に沈んでゆく夕日を、何の物思いもなく見入っていたら、至福の数分間であった。

日が沈んでから、レストランになっている城内の広間で夕食をすませてケルンに帰ったのだが、この日の成績は5作。いい一日だった。



仙溪 1996年5月29日
大型当前(ドイツ ケルン)
花器 メキシコ陶器
花材 ミルニア、根付枯バラ、椰子枯花梗
「GERMANY, KÖLN/SENKEI/MAY, 29, 1996」



●素子　1996年5月30日　ケルン大聖堂を背景に(ドイツ・ケルン)
花器／リュック　花材／クルクマ・シャローム、スズラン
『GERMANY, KÖLN/MOTOKO/MAY.30, 1996』



●素子 1996年5月30日 市内(ドイツ ケルン)
■花器／ボンボの猫 花材／造果、アロカシア、蔓
『GERMANY, KÖLN/MOTOKO/MAY,30,1996』



GERMANY
EUROPE Köln



●仙溪 1996年5月30日 市内(ドイツ ケルン)
■花器／真鍮金立 花材／エニシダ、メディニラ・マグニフィカ
『GERMANY, KÖLN/SENKEI/MAY,30,1996』



●素子 1996年5月30日 ブルグ城(ドイツ・ケルン)
■花器／古タイル 花材／トルコ桔梗、ヘデラ
「GERMANY, KÖLN/MOTOKO/MAY.30,1996」



●仙溪 1996年5月30日 ブルグ城(ドイツ・ケルン)
■花器／コルク櫻樹皮 花材／バラ
「GERMANY, KÖLN/SENKEI/MAY.30,1996」

●素子 1996年6月3日 畿畠(スイス ジュネーブ)
■花器／銅鍋 花材／ポピー、ケシの実、麦
SWITZERLAND, GENEVE/MOTOKO/JUN,3,1996j



ボピー、麦畠、森、その背景の山。

同じ道具だての高原で春を過ごしたことがあった。40年も昔のことである。

ここはジュネーブの街はずれから北東に8kmぐらい離れた農村で、北にはジュラ山脈が走っていて、高さ1500m程の山が並んでいる。ボピー(赤い雛罌粟)が咲いていたのは、この村の休耕地で、こんな風景を見れば誰だって摘みとついてみたくなるだろう。だがこれをいけるのは、素子の頃分らしい。翌朝、彼女はジュネーブの街で貰ってきた罌粟の枯れた実と、一束切らせてもらった小麦を、スイス在住で田舎の島田さんが用意してきてくださった銅の鍋にいけてはじめた。

6月の初旬、暖かいそよ風が吹いている広々とした麦畠で、

摘みとった花をいけていられる、こんな気分のいいことはな

い。それを一体何に感謝すればいいのだろう。ジュラの山の神様だろうか。

ジュネーブには国連ヨーロッパ本部や国際赤十字委員会の他に、200あまりの国際機関がある。

また19世紀の半ば頃から、イギリスの貴族達が休暇を過ごす土地として人気があり、ここを起点とする登山家が集まつたりするうちに、上流階級の国際的な社交都市としての機能をそなえるようになっていった。

いいホテルは大体19世紀に創業していて、宿泊名簿に記された各国の要人や有名な芸術家、映画人の名前が格式を高めている。

発展の跡をたどってみると、影響力の強い外国人によって育てられてきた都市なので、コスモポリスにならざるを得ない。スイスの他の都市、とくに首都ベルンとは全く違った性格を帶びていて、「ジュネーブはスイスではない」といわれるのも致し方ないことなのだろう。

SWITZERLAND
Genève
EUROPE



ジュネーブの市街からレマン湖沿いに北東に少し走ると、ヴェルソワの街を通る。右側の高い木立の下の棚が、200mか300mおきに区切れている。

そこに旧ロスチャイルド邸と、今は廃屋になっているが、昔、超有名女優だったリタ・ヘイワースとアガ・カーンが住んでいた大邸宅がある。道路から湖まで300mほどあるから敷地の面積は、それぞれで6万m²から10万m²ぐらいあるだろう。2邸のうちの廃屋のはうで枝物花材を切らせてもらえたよう島田さんと旧友の佐藤さんが手配しておいてくださった。

何年も人が住んでいないので庭は荒れているが、空木や薔薇の大きな木、杉や検査の大木、五月梅、楓などが広大な庭に茂っている。予備も含めて2週間ぐらいい続けていたらそれそうなほど花材が集まった。

豪壮な邸宅の広い庭は、無住の廃屋になっていても、何か強く心を惹くものがある。この土の下には多くの人の想いがしみ込んでいるのだろうか。

形のととのったジャーマンアイリスの生花と、荒れるにまかせた庭とを対照させてみたかったのである。△

EUROPE



SWITZERLAND Genève



でも充実した一日だった。

三日月形のレマン湖の西端の尖った所がジュネーブ。北岸は丸くふくらんでいて、東端のショーン城までの距離は80km。湖岸の見晴らしのいい道を通って1時間で着く。

ショーン城もヨーロッパの他の都市と同様に、ローマ時代からその駐屯地となっていたが、恒久的な石造の城壁として現在のようになったのは13世紀だそうである。

現在ではしっかりと固定しているように見えるヨーロッパ諸国との国境と君主は、有史以来、目まぐるしく変わってきていた。絶えず攻防が繰り返されてきた中世の城は、戦闘に即した力強い風貌をそなえている。案内書にはショーン城が湖に浮かぶ優美な城と書かれたりしているが、私にはそう見えない。戦うことがなくなつただけの城壁なのである。

私達が安穏な気持ちで花をいけられるのも、ここが戦いつ日々から遠く隔たった今だからなのだろう。城壁も時を経て表情はおだやかになり、人を喰らしていた深い濠にも新緑が優しく枝をさしのべている。

老年に到った将軍が、時折うかべる寛容さにつけ入って、私達は花をいたのかかもしれない。

スウェーデンをぶり出しにしてはじめた私達の“花ふたり

旧ロスチャイルド邸は、手入れが行き届いている。この大邸宅は一族の別荘の一軒なのだそうだが、一体どれぐらいの財力があるのだろう。邸内には花をいけてみたい場所がいくつもある。梅花空木と百合をいけた部屋の前の庭は、湖岸まで200mほど芝生が広がっていて、岸にはボプラが12本そびえ立っている。そこから一段下には石の手すりが付いていて、レマン湖の対岸までが一望できる。この石のテーブルの上にいける花は、霞む遠景の中に浮き上がらせたい。

私が立花を作っている間に、素子はこの2作を済ませていた。次販の立花を飾った小部屋は、邸内の他の部屋とはかなり趣が違う。使われなくなった教会の石材や建具を使って建てたのだそうだが、古雅にしたいような一隅である。

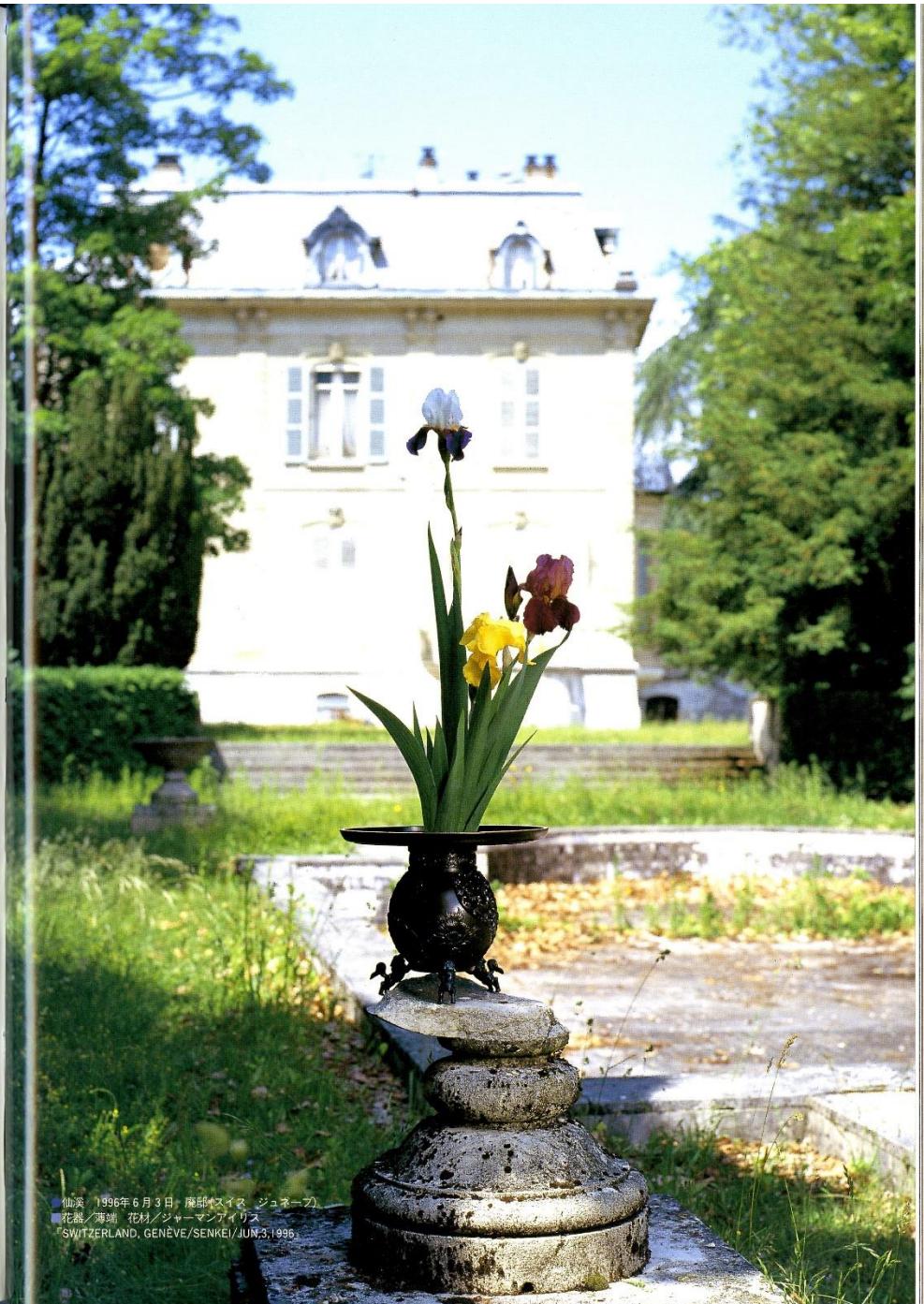
この日、ここで2作いけたのだが、素子は有名なレマン湖の噴水を入れた1作を撮りたいという。前日は小雨で止まっていたが、今日は出ているそうと、お屋敷の人が電話で確かめてくださった。5作を撮り終わって早々にジュネーブに引き返したら噴水は出ていない。近くにいた人に聞いてみると、5分ほど前に止まったそうである。✓



●仙溪 1996年6月4日 旧ロスチャイルド邸(スイス ジュネーブ)
■花器／立花鉢 花材／山桜子、芍薺、枯シダ、コロナ唐松、チャボ檜葉
「SWITZERLAND, GENÈVE/SENKEI/JUN,4,1996」



●素子 1996年6月4日 旧ロスチャイルド邸(スイス ジュネーブ)
■花器／素焼鉢 花材／アイリス、アンセミス、玉シダ
「SWITZERLAND, GENÈVE/MOTOKO/JUN.4, 1996」



仙溪 1996年6月3日 旧ロスチャイルド邸(スイス ジュネーブ)
花器／薺焼 花材／ジャーマンアイリス
「SWITZERLAND, GENÈVE/SENKEI/JUN.3, 1996」



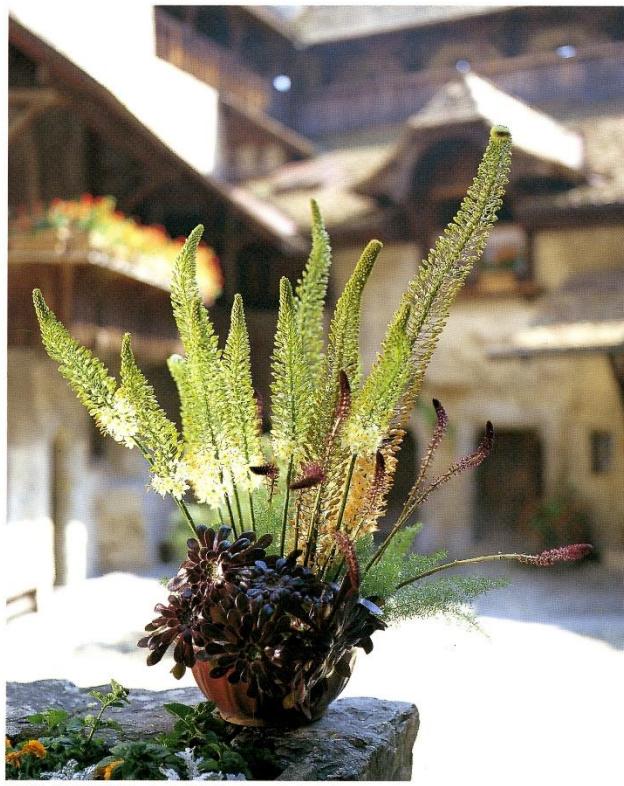
●素子 1996年6月4日 旧ロスチャイルド邸(スイス ジュネーブ)
■花器／陶板トレイ 花材／白アスパラガス、アーティチョーク、ゼラニウム
『SWITZERLAND, GENÈVE/MOTOKO/JUN.4,1996』



●素子 1996年6月4日 旧ロスチャイルド邸(スイス ジュネーブ)
■花器／マイセン焼花瓶 花材／梅花空木、百合
『SWITZERLAND, GENÈVE/MOTOKO/JUN.4,1996』



●仙溪 1996年6月4日 旧ロスチャイルド邸(スイス ジュネーブ)
■花器／染付角皿 花材／谷渡り、ゼラニウム
『SWITZERLAND, GENÈVE/SENKEI/JUN.4,1996』

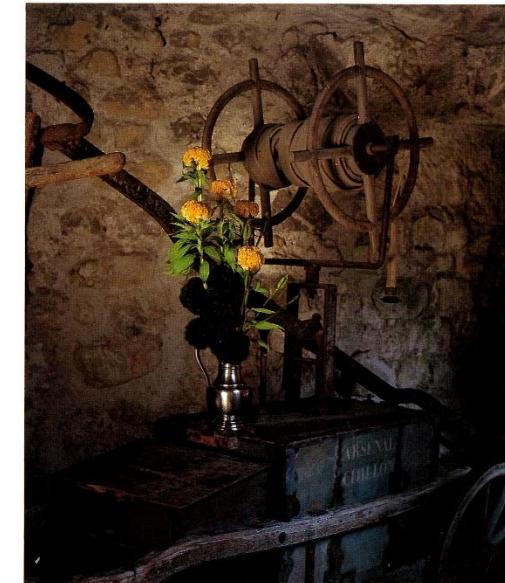


●仙溪 1996年6月5日 シヨン城中庭(スイス モントルー)
■花器/紅色精陶鉢 花材/エルムルス、弁慶草、アスパラガス
「SWITZERLAND, MONTREUX/SENKEI/JUN.5,1996」

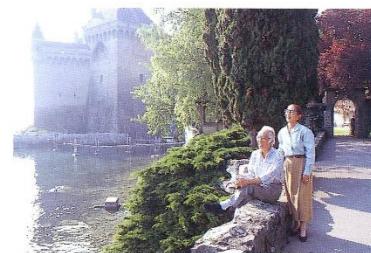
SWITZERLAND
EUROPE Montreux



●仙溪 1996年6月5日 シヨン城外廊(スイス モントルー)
■花器/白桜斎 花材/鶴鳴、バラ
「SWITZERLAND, MONTREUX/SENKEI/JUN.5,1996」



●仙景 1996年6月5日 シヨン城内(スイス モントルー)
■花器／錫水差 花材／鶴頭、チューリップの実、苔玉
『SWITZERLAND, MONTREUX/SENKEI/JUN,5,1996.』



●素子 1996年6月5日 シヨン城外廻(スイス モントルー)
■花器／ヘレンド花瓶 花材／バラ3種、ルナリア
『SWITZERLAND, MONTREUX/MOTOKO/JUN,5,1996.』

●素子 1996年6月5日 シヨン城を背景に(スイス モントルー)
■花器/真露コンポート
花材/アリウム・ギガンジューム、ウチワサボテン、スカビオサ、苔珪湖
『SWITZERLAND, MONTREUX/MOTOKO/JUN.5.1996』



“花ふたり旅”のエンディングの地となったのはハワイ。
そこで末娘、はなが結婚式を挙げることになったからである。
私達のふたり旅、和則と櫻子のふたり旅、そして順詞とはなのふたり旅。
ここからまた3組の夫婦の新たな旅がはじまったのである。



“花ふたり旅”を思い立った5年前、すべり出しはスウェーデンからだったが、そのすべり出しを快い調子で押し出してくれたのは婦人画報社の星野真理子さん。そして星野さんがカメラの松尾幹生さんをスウェーデンの仕事に連れてきてくれた。松尾さんとならこのあとの4年間、一緒にやっていけそうだと初対面で思い込んでしまった。写真を撮って頂く以上、尊敬できる写真家であることを求めるのは当然だが、毎回3週間近く一緒に旅を続ける場合、人柄に好感を持てなくては途中で挫折するのを見えていた。そしてアシスタンントとして長男の和則が旅に加わってくれた。

もし心配があるとすれば、それは私と素子がお互いに上手に歩調を合わせられるかどうかということだけだった。留守のほうは、長女の櫻子がいるから大丈夫と序文で素子もいつている通り、安心だった。

下の娘のはなは、淋しがり屋の甘えっ子だが、私達の仕事に大賛成なのでこれも大丈夫だろう、ということで旅立つことになったのである。

最初の年は秋のスウェーデン。

2年目はクリスマス・シーズンのアメリカ。

3年目は初夏のトルコと、真夏に近いエジプト。

そして4年目の晩春にオランダ、ドイツ、スイスとまわって“花ふたり旅”は終わる筈だった。

ところが、最終回のオランダ、ドイツ、スイスへの出発の準備をはじめた頃、下の娘のはなの結婚が決まった。そして「結婚式は自分の誕生日の6月9日にハワイで挙げることにしたい。丁度お父さんやお母さんのヨーロッパでのお仕事が終わる頃だから、帰りにハワイに寄ってください。私達がご招待いたしますから」と告げられた。スケジュールの都合もあるので松尾さんに連絡したところ“花ふたり旅”的エンディングは、是非はなさんのハワイでの結婚式になさいと勧められた。星野さんも同じように賛成してくれた。

考へてもいなかった結びの一章ができた訳である。

私達のふたり旅、和則と櫻子のふたり旅。そして星という姓に変わったはなと順詞とのふたり旅も始まった。

HAWAII

Honolulu



●素子 1996年6月9日 カハラビーチ(ホノルル) ■花器／三色陶花瓶 花材／アンスリューム 針金
『HAWAII,HONOLULU/MOTOKO/JUN,9,1996』



●素子 1996年6月8日 公園(ホノルル) ■花器／ガラス(エングマン作) 花材／胡蝶蘭、ハイビスカス
『HAWAII,HONOLULU/MOTOKO/JUN,8,1996』

ハワイでは、皆で結婚式のために教会に飾る花を作つてやりたいし、私達もハワイの自然を取り入れた花をいけてみたい。結婚式を中においた4日間だったが、それぞれ2作ずつ撮ることができた。

式の前日に公園の植え込みで1作ずつ。当日の朝、どうしても撮りたかった海岸の花をいけ終わつたあと、私と和剣とで式場のワイオリ教会へ、大作を出掛けた。そこは丘の上で樹木が生い茂つていて、蒸し暑い上に蚊が多い。式的直前までかかつていて上げたが、暑さと疲れて式が始まつても頭がぼんやりしている。花嫁の父は泣くものきまつっているのに、涙がこぼれなかつたのはそのせいなのである。

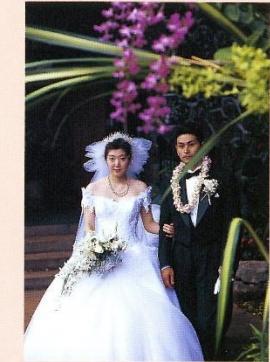
花嫁のブーケやコサージュは櫻子が前夜おそらくまでかかつてこしらえてくれた。素子は午前中海岸でいた花を大急ぎで片づけ、旅先での結婚式を滞りなく終わらせるために、はなに付きっきりでいてくれた。

櫻子のときもそう思ったが、結婚式のときの娘は私と素子が見守っていた花が、いつの間にか蝶に変わって、優しくて美しくて幻のような姿で静かにどこかへ舞い去っていく、夢の中の束の間なのではないだろうか。うつりしているうちに目が覚めて、もの淋しくなるのである。

HAWAII

Honolulu

●仙溪 1996年6月8日 公園(ホノルル)
■花器／陶花瓶(柳原睦夫作)
花材／オンシジューム、アンスリューム、^{ムラサキ}合歓の木の実、枯ジンジャー
『HAWAII,HONOLULU/SENKEI/JUN,8,1996』



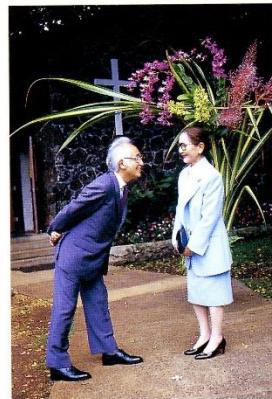


●仙臺 1996年6月9日 ワイオリ教会(ホノルル)
■花器 / 金銀金の桶
花M / コヨガハイラン、デンファレ、アナス、シダ
HAWAII,HONOLULU/SENKEI/JUN.9,1996.

著者略歴

桑原 仙溪(くわはら せんけい)

1927年生まれ。1953年慶應義塾大学卒業。1981年
桑原尊慶流第14世家元を襲名。各華道展、NHK
出演・新聞雑誌で活躍。著書「京都花ごころ味ご
ころ」、夫人と共著の「花ふたり」(共に婦人画報社
刊)。財団法人日本いけばな芸術協会理事、京都いけ
ばな協会会长、財団法人京都市文化藝術協会副
理事長。



桑原 素子(くわはら もとこ)

1932年、桑原尊慶流第13世家元、桑原尊溪の長女
として京都に生まれる。6歳より父尊溪にいけば
なの指導を受ける。1950年同志社女子高校卒業
後、18歳より華道家として活躍。後進の育成と共に、
NHK出演他、新聞雑誌で活躍。著書は「花
ふたり」他。

PROFILE

花ふたり旅

1997年3月30日初版発行

著者——桑原仙溪 桑原素子

発行人——本吉敏男

発行所——株式会社 婦人画報社

〒105 東京都港区西新橋2-9-1 振替00120-8-40010

☎03-3580-1904(販売部) 03-3501-6784(編集部)

印刷所——凸版印刷株式会社

© SENKEI KUWAHARA, MOTOKO KUWAHARA

1997 Printed in Japan ISBN 4-573-14214-2

〔注〕本書の全部または一部を無断で複数複数(コピー)することは、著作権法上での例外を
除き、禁じられています。本書からの引用を希望される場合は、日本復権センター
(☎03-3401-2382)にご連絡ください。